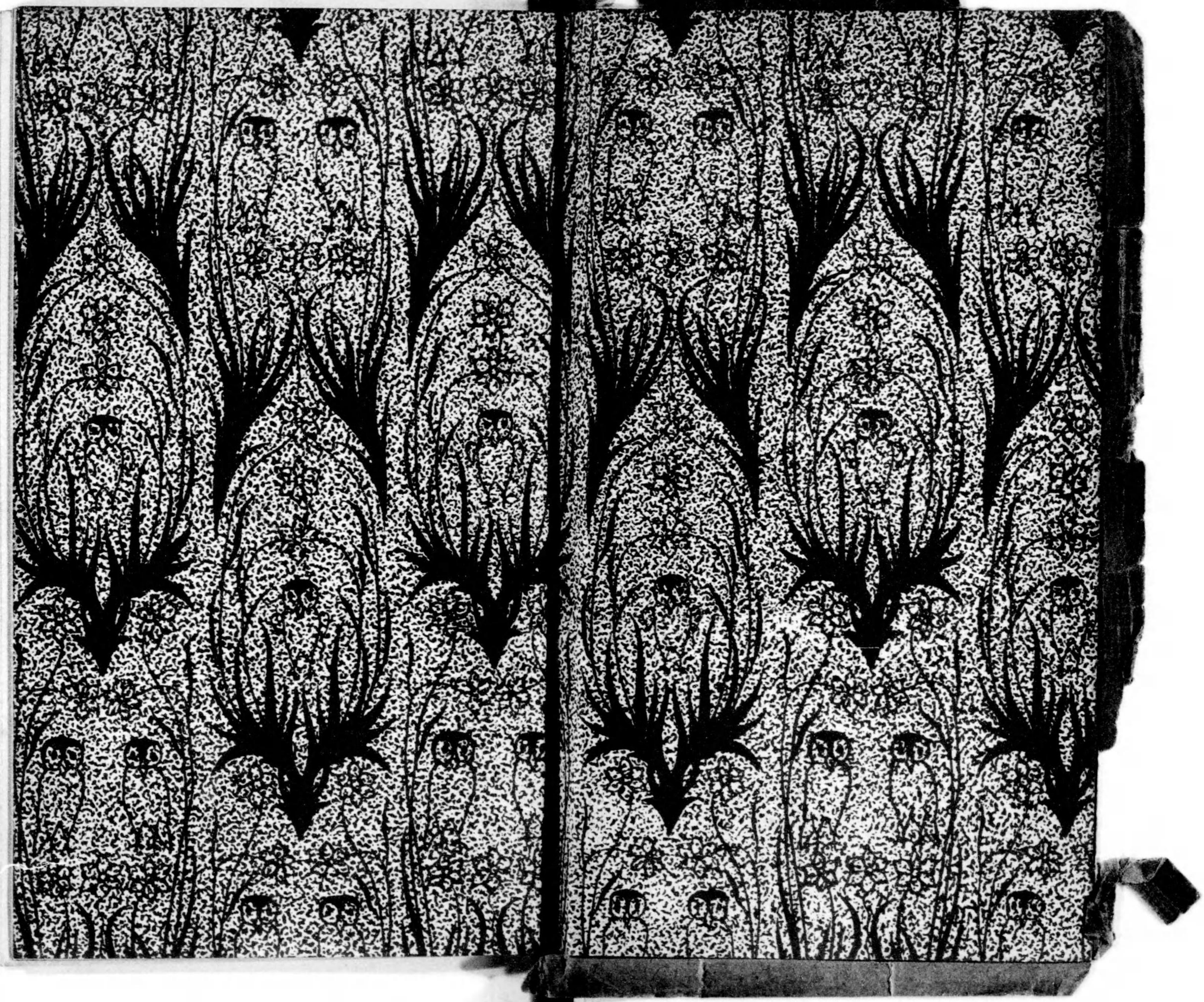
投稿

り 掘 手



特100
345

現代文藝叢書
第二十八編
（長塚節）

芋を教ふ

掘

師より

大正
2. 8. 22
内交

十五年前の著者

芋掘り

一

小春の日光は岡の畑一杯に射しかけて居る。岡は田と櫟林と鬼怒川の土手とで圍まれて他の一方は村から村へ通ふ街道へおりる。田は岡に添うて狹く連つて居る。田甫を越して竹藪交りの村の林が田に添うて延びて居る。竹藪の間から草家がぽつ〳〵と隱見する。箒草を中途から伐り放したやうに枝を擴げた櫟の木がそこにもこゝにもすく〳〵と突つ立つて居る。田にはもう掛稻は稀で稻を掛けた竹の「オダ」がまだ外されずに立つて居る。「オダ」には黃昏に鳴でも來て止る位のことであるだらう、見るから淋しげである。鬼怒川の土手には篠が一杯に繁つて居るので近

くの水は其蔭に隱れて見えぬ。のぼる白帆は篠の梢に半分だけ見えて然かも大きい。土手の篠を越えて水がしら〳〵と見えるあたりはもう遙の上流である。だから篠の梢を離れて高瀨船の全形が見える頃は白帆は遙かに小さく蹙まつて居る。土手の篠の上には對岸の松林が連つて見える。更に其上には筑波山が一脚を張つて他の一脚を上流まで延ばして聳えて居る。小春の筑波山は常磐木の部分を除いては赭く焦げたやうである。其赭い頂上に點を打つたやうに觀測所の建物がぽつちりと白く見える。稍不透明な空氣は尙針の尖でつゝくやうに其白い一點を際立つて眼に映せしめる。櫟の林は此の狹く連つて居る田と鬼怒川との間をつないて横につゞいて居る。田も遙かのさきは櫟林に隱れて、鬼怒川も上流はい

つか櫟林に見えなくなる。櫟の木はびつしりと赭い葉がくつゝいて居る。岡の畑は向へいくらか傾斜をなして居るので中央に立つて見ると櫟の林は半隠れて低い土手のやうに連つて見える。林の上には兩毛の山々が雪を戴いてそれがぼんやりと白い。此の如き周圍を有して岡の畑は朗かに晴れて居るのである。土は乾き切つて既に二三寸に延びた麥は岡一杯に薄く綠青を塗つたやうである。そこにもこゝにも百姓が小さく動いて居る。麥をうなつて居るものもあるが大抵は芋掘りの人々である。四五人の手で芋を掘つて居る畑の緣には馬が茶の木に繫いであつて俵が轉がつて居る。此俵があれば遠くがらでも芋掘りの人々であることが解る。馬は退屈まぎれに茶の木をむしることがある。其時一人が馳けて來て轡をがちんと一つ極めつけて叱り飛ばせば復たおとなしくなつてばさり〳〵と尾を動かして居るのである。各自の手もとは忙しい。然し岡は只長閑なさまである。日は稍傾いた。忽然筑波山の絶頂から眩い光がきら〳〵と射して來た。毎日同一の時刻に此の光は此岡へ強く射しかけて來る。百姓の或者は筑波山で火を燃やすのだらうなどといつて居る。然しそれは觀測所のガラス窓が日光を反射するのである。岡の畑に變化が起つたとすれば數時間に只此丈である。ガラス窓の反射はやがて消えてしまつた。芋掘りの人々は勿論此の光は知らなかつた。兩毛の山々がぼんやりした日は西風が吹かないので隨て暖かい。暖かい日は土いぢりの芋掘りには此の上もない日和である。兼次とおすがも街道へおり口の小さな畑で芋を掘

つて居る。隣づかりの桑畑は葉が大凡落ちて兼次の芋畑へも散らばつて居る。青いよわ〳〵した小麥が生え出して居る。小麥は芋の間に二畝づつ蒔かれてある。芋の莖はぐつたりと茹でたやうである。考へて見ると芋は恐ろしい强情なものであつた。秋の風が日となく夜となく根氣よくいひ寄つてもどうしても厭だ〳〵といひ通して首を横にばかり振つて居た。秋風が腹を立てゝ其廣い葉を吹つ裂いてもたうとういふことは聽かなかつた。それが秋の末に一夜そつと眞白な霜が天からおりたら理窟はなしにぐつたりと靡いてしまつたのである。おすがは芋の莖を菜刀でもとから切つて先へ出る。菜刀といふのは庖丁のことである。後から兼次が鍬のさきで芋の株を掘り起す。びか〳〵と光る鍬の先をざくつと芋の株へ斜に突き立てゝぐつと鍬を持ちあげると大きな土の塊がふわりと浮きる。鍬をそつと拔いて先の株へ移る。小麥へ障らぬやうに極めて丁寧に掘つてはさきへ〳〵行く。おすがは莖を切り畢ると後へもどつて掘つてある大きな土の塊を兩手で二尺計り揚げてどさりと打ちつける。こまかな土がはぐれてこゞつた子芋の塊から白い毛のやうな根がぞろつとあらはれる。それから芋と芋とを兩手の平でぶり〳〵とはがしてやがて俵を立てゝ入れる。さうして穴の土を手のさきでならして先の塊をほぐす。乾いた畑に濕つた丸い穴のあとが一つづゝ殖えて行く。日光が其土をあとから〳〵とこまやかに乾かして行く。芋の株を掘り畢つた時に兼次は鍬へついた土を草鞋の底でこき落して茶の木の株へ腰をおろした。鉢卷

をとつて額を拭つて居る。小春の暖かさはちく〳〵と痛いやうに痒いやうに毛穴から汗がにじみ出すのである。おすがも兼次の側へ來た。うつぶしに成つて居た爲かおすがの顔もほてつて居る。村の若者が一人馬へ大根を積むで來た。若者はばか〳〵と四つ脚の拍子よく走せて行く馬の後から手綱を延ばして跟いて行く。

「どうした、奴等がつかりしたか」

兼次を見て若者はいひ捨てゝ去らうとした。兼次はそれには頓着なしに

「大根一本おいてけ」

立ちあがりながら叫むだ。若者は

「どう〳〵どうよ」

馬の口もとを止めて、ぎつしり括つた荷縄から一本引つこ抜いて

「そら二人で喰ふむだぞ」

と兼次を目掛けて抛つた。大根は茶の木へがさりと止つた。兼次は菜刀で大根をむいて嚙りはじめた。大根には幾らかの辛味はあるが兼次の乾いた喉にはそれでも佳味かつた。其所へ又一人鍬を擔いで田甫からあがつて來たものがある。

彼は兼次を見ると

「なんのざまだ奴等ァハ、、」

唐突に惡口をいひ出した。

「いゝから羨むなえ」

兼次はすぐにやり返す。

「篦棒いつまでたつても夫婦にも成れねえやうな奴等なむでやつかむかえ。親爺奴きかなけりや喉ッ首でも押してやれ。やくざな野郎だあ」

平生悪口をいひ合うてる間柄だけに思ひ切つた憎まれ口を叩いて去つた。おすがは彼等が來た時すぐに立つてうつぶした儘さつきのやうに土の塊をほぐして芋をぼり〳〵とはがして居た。兼次も別に氣にするやうでもなくおすがと別のうねの芋をはがして俵へ入れはじめた。

二

兼次とおすがの間柄は久しいものである。それで今では拾ひ手のない日蔭物といふ形に成つて居る。

百姓の間に生れた子は隨分粗末な扱ひである。お袋が畑で仕事をして居れば笠の中へ入れて畑境の卯つ木のもとへ捨てゝおく。泣いて〳〵火のついたやうに泣いても滅多に構へつけることもない位だから隨て營養も不足なのか六つ七つまでは發育の悪い子も數々あるが、手足がついたとなると容赦もなくこき使はれるので其故か十七八に成ると驚く程立派な體格を持つやうになる。それと同時に女の一人位は拵へるのである。例令そんなことが無いにしても同年輩の誰彼と屹度夜遊に出掛ける。それがだむ〳〵募つて來ると村の隅から隅までふら〳〵と押し歩いて小娘でもある家の風呂を覗くといふやうになる。兼次も年頃來た時には自然

夜遊に屈托した。さういふ場合に両親はどうするかといふと、自分が以前に其覺えがあつて格別悪いことゝも思はないし一向平氣といふのではないが仕方ないといふ位なものだ。それだから縄の一房も絢ひ出すとか朝草の一籠も餘計に苅るとか仕事に差支がなければ怪我に一言もしみじみした小言などはいはぬが普通である。兼次が夜遊に屈托した頃兼次の家からでは離れて居るが同じ村のうちで幾らか暮しの樂な因業者の夫婦があつた。代々其家は仙右衞門といつたので其が訛つて「センネモドン」と呼ばれて居た。何時の間に誰が教唆したか所謂小若い衆と稱する兼次等の仲間が其家に悪戯をはじめた。丁度霜が二三度おりた頃で宅地へなつた柿で串柿を拵へて日南の壁へ吊したのがあつた。串柿は下で胡麻の

殼を焚けばいつの間にか落ちて了ふといふので或夜そつと其串柿を外して散々いぶして復たそつと掛けて置いた。案の如く柿はそれから一つ落ち二つ落ちて今年の柿はどうかしたといふうちに滿足に乾上つたものはなくなつた。固より悪戯されたといふことは知らう筈がない。悪戯としては極めて成功したのである。悪戯者はつけあがつた。或晩薪や麁朶や日頃汗水垂らして掘つた木の根などが壁に堆く積んであつたのを大勢で持ち運び〳〵入口の戸を壓して一杯に積んでおいた。翌朝水汲みに出やうとした女房が見付けて騒ぎになつた。夫婦は火のやうになつた。口もきかずに半日かゝてもとの壁際へ積み直した。若い衆の悪戯であることは分明であるが扨て手の出しやうがない。深く遺恨に思ひながら我慢をして

しまつた。おすがの家は此の仙右衛門の家のうしろで屋敷つゞきである。其近邊では一番物持で土藏も一つは立てゝある。近所隣のものは皆おすがの家の風呂を貰ひに來る。仙右衛門の女房が或晩風呂を貰ひに行くと若い衆がそこらに出沒して居るのを見た。そこで早速おすがの兄貴に告口をした。兄貴が誰だ〳〵といひながら裏戸へ出るとばた〳〵と五六人で逃げ出す足おとがした。然し此風呂場で追はれるのは始終あることで追ふ者も長追はしない。それは自分の家の娘に間違があつてはならぬといふのだから娘が湯上りの赤い顏をして綻びでも縫つて居ればそれで安心が出來るからである。逃げた若者は欅の蔭にでも隱れて居ては又のこ〳〵と出て來る。仙右衛門の女房は此晩茶うけの菜漬が甘いといふので

むしや〳〵嚙つて饒舌つたので一番あとではひることになつた。裸になつたまゝがらつと裏戸を開けて風呂場へ駈けて行つた。おゝ寒いといひ乍ら風呂の蓋をとつて手拭持つた手を突込むだ。さうしてアレと驚いた聲で怒鳴つた。風呂の湯がちつともなくなつてるといふ騒ぎである。寒さが急に身にしみて慄へて居る所へ廐の蔭から一人飛び出して土だらけの大根を後から肩へぶつ掛けて逃出した。女房は激怒したはづみに裸のまゝ闇の中を追ひかけた。さうして何かへ躓いてどうんと酷い勢で轉がつた。忽ち三四人の聲でわあと怒鳴つて逃げてしまつた。さつきおすがの兄貴へ告口をしたのは仙右衛門の女房であるといふことを傭人から聞いたので若い者は風呂の栓を拔いてそれから大根を背負はして、豫め二

人で縄を持つて居て追つて來る所をぐつと縄を引つ張つたから足を拯はれたのである。女房は口惜しくて翌日は起きなかつた。然し此の事があつてから惡戯はすつかり止むだ。それは間へ人が立つて兎に角若い衆へ謝罪つてどうか惡戯はしないでくれと年嵩の二三人に賴むだからである。兼次も此の惡戯の仲間であつたがいつかおすがの家の傭人と別懇になつた。時には傭人の懷へもぐり込むで泊つて行くこともあつた。以前は大勢で押し歩いたのが屹度一人でおすがの家のあたりへ行つて褞袍を被つて立つて居るのが常のやうになつた。おすがゞ風呂へはひると其側へ行つては只立つて居る。おすがは默つてぽちり〳〵と手拭の音をさせながら成丈長湯をするやうになつた。時にはおすがゞ流し元で洗ひ物をして居

ると窓から篠棒を出して知らせをすることもあつた。二人は遂に扱帶（シゴキ）と兵兒帶とをとりやりして型の如き關係が結ばれてしまつた。若い女の多くは男に執念くつけまはされゝばそこは落花流水の深い仲に陷るのである。互に決して離れまいといふ約束のもとに體につけた一品が交換される。孰れが厭になつても此一品が相手にあるうちは事件はこゞらける。女が親族などに强ひられて嫁にでも行かうとなつた時には男は女をおびき出すことがある。其所には双方から人が掛つてでつたすつたの絡れになつて結局は平氣で女が嫁に行く。そこは財産のある方から幾らかの手切が出るといふ捌きになる。手切の多少で二晩や三晩はでた〳〵で過る。それでも古來の習慣で此の變則な黄金の威力は大抵の紛擾を解決せしめるこ

とが出來る。それが兼次とおすがの間はこむな庖丁で南瓜を割る位な手ごたへでは濟まぬ強い關係が結ばれたのである。然し此の時はまだおすがの家の傭人より外には二人の間を知るものがなかつた。暫時にして若い衆の間にそれが響いておすがを狙ふ者はなくなつた。やがて波動の如く其が村一杯に擴がつた。それでもこんなことは特別の事件が惹き起されなければ人の注意に値せぬのが一般の狀態である。此の如くにして幾日は過ぎた。

或早朝のことである。時候はまだ寒さがぬけぬ頃だ。兼次は深い心配な顏で綽名が四つ又(ヨツマタ)で通つて居る男の所へ來た。四つ又は豚の仲買をして小才が利くので豚での儲は隨分大きい。あれで博奕が好きでなければ身上が延びるのだと評判されて居る。兼次の親爺と殊の外別懇である。

「兼ら何だえこんなに早く」

と四つ又は聞いた。

「おらちつと頼みたくつて來たんだ。おら「ツァ、」は短氣だから打つ殺されつかも知んねえ」

「なにして又打つ殺れるやうなことに成つたんだ」

「ゆんべ遊びに出て褞袍なくしつちやたんだ。おすがら内の土藏ん所け置いたの今朝盗まつたんだか何んだかねえんだ。それからおらうちへ歸れねえ」

「なんだそんなことかおれが謝罪つてやつから持つてろ」

四つ又は兼次の家へ行つた。お袋は竈に木の葉を焚いて居る。釜が今ふう〳〵と吹いて居る。四つ又はすぐに廐へ行つた。さうして

「ッァ、」おら何でもえゝからおれがいふことを聽いて貰れてえんだ。

突然にかういひ出した。「ッァ、」といふのは子が其父に對する稱呼であるが四つ文は格別の懇意である上に年齢が違ふから時としてはかういふこともあるのである。一つは戯談をいふのが好きな性質から四つ又は何時もこむな調子で兼次の親爺に對する。

「なんでえ朝ッぱらから」

とおやぢは不審相にして半はいつもの戯談でもいはれるやうに微笑しながらいつた。

「ッァ、に打つ殺されつかも知んねえて心配してむだから謝罪りに來たむだ。なんでもかんでも聽いてもらあなくつちやなんねえんだよ。」

「解らねえなひどく」

「いやわかつてもわからねえでも世間態もよくねえんだ。實は兼次がことだがおらぢへ來て……」

「あの野郎奴ほんとに夜遊ばかりしてけつかつて」

「さう「ッァ、」等怒つからしやうがねえ。ゆんべ褌袍盗られつちやつたといふんだがな。人のうちへ忍び込むでどうしたのかうしたのつて人間きもよくねえ噺だからまあ餘り騒がねえ方がえゝんだ。褌袍の一枚位仕方あんめえ。此れまでそんなことあつたんぢやなし、いふこと聽いた

らよかんべえ」

「それぢや任せべえ。兼こと連れて來てくろ」

此れで褞袍の一件は濟むだ。其褞袍は其後盗んだ奴が元の所へ捨てゝ置いたので再び兼次の手にもどつた。兼次はそれを引被つて依然としておずがの許へ通つて居た。

三

暑さが漸く催して此から百姓の書入時といふ茶摘の頃までは何の噂もなかつた。春も八十八夜となつて草木のやはらかな緑が四方を飾るやうになるとみじめな姿で顧られなかつた畑のへりの茶の木のめぐりも赤い

襷の女共が笑ひ興じて俄かに賑かになる。さあ焙爐の糊をかくのだといふうちに茶の葉が延び過ぎるといふ騒ぎである。兼次の家でも茶の葉が強くなつて、もう一日捨てゝおいたらとてもよりつからぬといふので隣近所と「イヒドリ」をして兎にも角にも一日に摘みあげる手筈をした。親爺は朝から焙爐へかゝつて居る。「イヒドリ」といふのは手間の交換でそつちからこつちへ一日仕事に來ればこつちからも一日仕事に行くことである。其頃兼次の家では婆さんが長らく老病に罹つて居た。丁度其日は藥がなくなつたといふので忙しい仲ではあるが鬼怒川を越えて一里ばかりさきの醫者の所まで行かねばならぬことになつた。親爺は毎日蒸し暑い焙爐の前で働いたので幾分ならずもう體が疲れて居る。焙爐を兼次

に任せて骨休めながら一寸行つて來ようと思つたのであつたが兼次がいきなり

「ッァ、おれ藥貰ひに行つて來べえ」

とやつたのでそれでも自分が行くとはいはれぬので澁々と兼次を出してやつた。街道は岡を越えて行く。畑には麥の穗が一杯に出揃つて快げに殺いて居る。菜の花がところ〳〵に麥畑から拔け出してさいて居る。畑の境の茶のうね〳〵には白い菅笠がならむで麥の穗の上にふわ〳〵と動いて居る。そこからは幽かな唄の聲が麥の穗末のやはらかな毛から毛を傳はつて來る。空からも土からもむづ〳〵と暖いさうして暑い氣が蒸し〳〵して遠きあたりはぼんやりと霞むで居る。若い者の心はもうそわ〳〵して落ちつかない。兼次は急いで行つて來た。然し歸りには此岡の畑は空しく通過することが出來なかつた。おすがゞ五六人連で茶摘をして居る所へ引つ掛つてしまつたからである。女達は一畝の茶の木を向合ひになつて手先せはしく摘むで居る。瓜先の音がぷり〳〵と小刻に刻むで聞える。兼次は揶揄はれながら自分も茶を摘むで乘氣になつて騷いで居る。

「兼ッつあんはおすがさんげばかし贔屓しねえでおら方へも來たらよかつぺなァ」

といつたのはおすがの向に居た女である。

「ほんとだおいとさむ、可笑しかつぺなァ。」

少し離れた方からも聲がした。

「そんじや行くべえ」

と兼次はおいとの方へ茶の木を押し分けて行つた。

「やだよう、兼ッつあん、構ァねえこんなに土だらけにして」

と泣聲を出したのはおいとの側に下枝を摘むで居た一番小さな子であつた。兼次が其子の籠へ土足を蹈込んだのである。

「駄目だよ、陽氣のせゐだよ、誰だかはどうかしてんだからなァ、おいとさん」

又さつきの少し離れた方から聲がした。此は稍年増なお安であつた。

「おらげもすけたらよかつぺなァ兼ッつあん、摘んですけなけりや話してやつからえゝよ」

とお安は又からかふ。兼次はお安の方へ行く。

「あらまあ、兼ッつあんはこんなに小麥踏ンぢやして怒られべえな」

おいとがこんどは苦情を持ち出す。茶の木に添うては小麥の畑がある。小麥と交ざし作りの豌豆が小麥の莖にからみながら立ちあがつてしほらしい花をびつしりとつけて居る。

「そんなに摘みえゝとこばかし摘んで兼ッつあんはやだよおら、頼まねえよ」

お安がつゞいて苦情を持ち出す。兼次はお安の肩を叩く。

「おゝひでえまあ、おれことぶつ飛ばしたんだよ、誰さんことかはぶたねえんだんべえな」

「さうだんべえなァァハ、、、」

みんなが一度に笑出す。おすが許りは默つて居る。こんなことで兼次は散々に暇どつた。空には雲雀が交るがはる鳴いて居る。おやぢが叱る急げ〳〵といふやうに喉が裂ける程鳴いて居る。それでも兼次は頓着なしに指の先の青くなるまで茶を摘んで居た。漸く氣がついた時に一散走りに走りつゞけて家に歸つた。幾ら駈けても後れた時間の取り返しはつかぬ。兼次の姿が見えると親爺は

「何してけつかつた、ぶつ殺されんな」

と怒鳴つて棒を持つて飛び出した。兼次は青くなつて逃げた。若いだけに足が達者である。親爺が門へ出た時にはもう前の櫟林へ姿は隱れてしまつた。親爺は焙爐の茶が焦げつくので何處までも追ひつめる譯には行かなかつた。兼次が藥貰ひに出た跡で手に餘る茶の葉をいぢつて居たのであるが強くなつた葉はいくら荒筵の上で押し揉むでも容易によりつからぬ。焙爐の火力を強くして只がさ〳〵な茶を乾かした。疲勞は其癇癪を促した上に焙爐の蒸し暑さは一層親爺の腹をむかむかさせたのである。隣近所の二三人が出て漸く兼次を見つけた。さうして例のやうに四つ又へ詫を賴むだ。四つ又はぶらりとやつて來た。

「ッァ、獨で太儀(コヘ)かつぺ」

「こはえな」

「うむこはえ筈だ、つまんねえ料簡出すから」

「何よ又そんなことゆつて」
「なにつて兼ことぶつころすなんて騒いてんぢやねえか」
「此忙しいのにあんまりのさくさして居やがつて小世話焼けたからよ」
「のさくさしたつて「ッァ、」がにや分んめえ。先生がほかさ行つて居なかつたんで待つてたんだつて云ふんだぞ。「ッァ、」行つたつて先生が居なくつちや駄目だんべ。それも聞きもしねえでぶち殺すなんてそんな短氣出すもんぢやねえよ」
お袋は晝餐の菜の油味噌の豆を煮つて居たが皿へ其豆を入れて四つ又へ出した。そうして
「本當におらぢの「ッァ、」は短氣なんだから」
と獨言のやうにいつた。
「えゝからわッら知りもしねえ癖に」
とおやぢは又かァつとしてお袋を叱りつけた。
「それさうだからえかねえ。婆さまこと見ろまァおれが鹽梅(あんべえ)惡いから當てつけに兼こと怒んだ。一層おら死んだ方がえゝなんて云つてら。そんだからおれげ任せろよ。隣近所の暇つぶした丈でもつまんめえぢやねえか」
四つ又は殼竹割である。短氣なおやぢを威したり賺したりいひくるめるのは村でも此の四つ又一人なのである。
「うんそれぢや任せべえ」

といふことに成つた。

「そんだから愚圖々々しねえで何時でもおれが云ふこたア聽くもんだよ」

「おめえぢや仕やうがねえへゝゝゝ」

此が笑つて收ると四つ又は兼次を連れて來た。さうするとおやぢは

「此葉採むでくろ、兼」

といつたやうな譯でさつきの顏とは別のやうである。

四

其後いさくさはなかつたが兼次は依然としておすがのもとへ忍んだ。それではおすがの家で捨て置くまいと思ふ筈だがおすがのお袋は少し愚圖な氣のいゝ女で只娘が可愛くて兼次との間を裂かうなどゝいふ料簡は微塵もない。寧ろ村の評判の通り却て兼次の手引をしてやる位なものである。おすがの親爺は夜になればいつでもぐでん〳〵に醉拂つて前後も知らずに轉がつてしまふ。兄貴は若い嫁と裏の中二階へ昇つて寢てしまふ。それに傭人が兼次の邪魔杯はしないといふことに極つてるのだから攫まつた追はれたといふ騷ぎも聞かなかつたのである。然し村の噂が高くなると共に親類緣者の少しは小口の聞けるといふ手合が捨ておけないといふことで相談をした結果、それぢや兼次の家は財產は足らぬが貰ふといふなら一層の事おすがをやつたらよからう。嫁にとらぬといふならすつぱり手を切つて兼次をよこさぬやうに掛合はなければならぬと決し

た。おすがの叔父に伊作といふ博勞がある。此が又兼次の親爺と別懇だ。親爺は恐ろしい馬好で春も暖かになつて毛が拔け代つて古い毛が浮いたやうに幾ちか殘つて居るのを見ると堪らなくなつて徒來へ引き出しては撫でさすつて居るといふ程なのだから自然博勞の伊作が別懇になつた譯である。だから村では四つ又を除いては立入つた噺の出來るのは此の伊作である。伊作は一晩親族の惣代といふ名目で前條の掛合をした。然しそれは無効であつた。伊作は四つ又程には呑むでかゝることが出來ないのと、事件が改まつて甚だ重大であつたのとで親爺の返辭はきつぱりしたものであつた。嫁に貰ふことは首を切られても出來ないといふのである。いひ出したらもう後へ引かぬのが此の人間の性癖である。否此の家には屹度かういふ性癖の人間が生れるので此は血統である。伊作は古革の大胴亂で幾ら煙草を吸つて見ても名案は出ない。器量をさげた譯だが喧嘩にもならぬから引つ込むでしまつた。親族等は其頑固なのに激昂した。小波瀾が起らねば濟まぬやうな狀態になつた。斯の如き時に好いた同士の執るべき唯一の名策は爾來幾多の男女の間に實行されて且つ廢らない。一先づ手に手をとつて出奔するといふのがそれである。少し愚圖なお袋はどうかして兼次とおすがを一緒にしたいといふ心から自分の入惠智で遁がすことにした。兼次は或晩こつそり風呂敷包を抱へ出した。それから二三日たつて兼次が見えなくなつたといふ噂が立つた。其時兼次はおすがの家の土藏の二階に隱れて居てお袋の運ぶ握飯で凌いで居た

といふのである。三日たつてから日の暮れるのを待つて二人はお袋の生家の鬼怒川の向の或村へ行つた。表向から駈落となると双方の仲へ人が立つて纏りがつくといふのが一般の順序であるが、例の如く四つ又が其役目に頼まれた。其頃は梅雨に入つて百姓は體が二つあつても足らぬといふ時であつた。豚の仲買で百姓は餘りせぬ四つ又はこんな時の仲裁の役目には屈强だ。梅雨に入つてから珍らしく朝からきさ〳〵と晴れて心持のよい日であつた。四つ又はぶらりやつて來た。親爺は丁度田の代掻きから上つて來た處だ。四つ脚から腹一杯泥だらけになつた馬は厩の柱に繫がれた儘さすがに欝陶しいと見えて時々ぶる〳〵と泥を振ひながら與へられた一抱の青草を鼻の先で押しやり〳〵嚙むで居る。口から青い汁がはみ出して居る。厩の柱には天秤にする杉の棒が撓めてぎつしりと縛りつけてある。親爺は藁で括つた股引が股から下は泥だらけになつて顔にも衣物にもはねた泥が乾いて居る。家のうちで厩の側には葵の花が五六本立ちあがつてさいて居る。此葵は夏になれば屹度こゝに咲くので裏戸が開け放してあれば往來からでもすぐ目につく。卵屋の葵がさいたと人々は見て通る。葵は此の家の四季を通じて第一の飾りである。葵の側には此の稀な晴天を幸にお袋が一寸の暇を偷んで洗つた仕事衣が干竿に掛けてある。卵屋といふのは此の家の綽名で幾代か前に卵の商ひをしたものがあつたとかで今に至るまで村では卵屋と呼んで居る。

「代掻いたのか」

四つ又は厩の所へ行つて問ひかけた。親爺は暇があればかうして厩へ行つて馬の食ひ振を見て居るのである。

「やつと今をへた處だ」

親爺は簡單にかういつて井戸端へ行つた。股引の泥をざつと洗つて家にはひる。四つ又と共に上り框へ腰をかける。

「どうした兼が居なくちや仕事が巾ッたかんべ」

「そんでもどうやらかうやら代だけは出來た」

「忙しい所で濟まねえが今日はおれも頼まれたから來たんだ、惡く思つちや仕やうねえぞ、斷つて置くからな。どうしたもんだいまあ、おすがこと貰あも出來ねえ、兼次が足も自分の持物ぢやねえから止める譯にや行かねえつて伊作男げ斷つたつちいんだがそれも隨分酷え噺ぢやねえか。それに二人はどうしたつて切れねえ緣だ困つたものだぞありやあ。遁げたものはそりや手分けして捜せばどこに隱れたつて分るにや極つて居るやうなものゝ連れて來た所でおめえら方がちやんと極つてなくつちや女の方の身分になつても餘り慰みものにされたやうで世間へ顏向も出來ねえな。何もそんなに頑張らねえで一層のことおすがこと貰つちやつたらどうだ」

「此めえ親類うちから世話されたこともあんだが檢査めえだからつて斷つたんだから其方へ對したつて貰あ所の騷ぎぢやねえ」

「徵兵檢査ッてゆつてもあと三十日か四十日で大概（てえげえ）どうか極らな、そん

で兵隊に出たにした所で兩方で極めてだけ置く分にや差支あんめえ。そんなことゆふな理窟つちいもんぢやねえか」

「おらどうせ馬鹿だから構はねえが、どうしたつてうんたあ云はれねえ」

「酷くをかしなことといふんだな、そんぢや外に氣にちねえことでもあんのか」

「氣にちねえつたつて餘まり人を馬鹿にしてべえと思ふんだ。おらぢの野郎が甘口だつて何もお袋まで一緒に成つて人の相續人に障るやうなことして呉れねえでもよかんべと思ふんだ。おらどうせ馬鹿だから理窟なんざあ解らねえがさうぢやあんめえか。此間だつて兼が出だす晩にも後で氣がついて見りや裏の垣根(クヂ)のあたりに二人ばかりうろ〳〵して居たんだがおらちやんと見當がついてんだ。それぢやおれだつていめえましかんべえ。なあにあんな野郎うちに居なけりや居ねえつたつて困らねえから、云ふこと聽かなけりやぶち出すだけだ。おれ幾ら體が弱つたつてあら位な小わつぱにやまあだ自由にされねえ積だから」

「そんなに怒つて騒がねえつたつておすがことせえ貰へば怨みもつらみもあんめえ。あつちのお袋だつておすがも可愛いし兼次も可愛いしなんだからこつちせえ譯がわかれば仲よく暮せるつちいもんぢやねえか」

「檢査濟まねえうちはどうしたつて貰あねえから駄目だよ」

四つ又もどうせ駄目とは思つてもいふだけのことは云つて見ようといふ譯なんだが然しから出ては槍が降つても迚ても駄目だ。四つ又もそれ

は知つて居る。

兼次の家の庭には垣根について栗の大木がある。松と松との間にあるので枝が一方庭の方へばかり延び出して垂れ下て居る。房の如く長い花が一杯に白く咲いて居る。白い毛の生えた大きな毛蟲が葉をくつて枝の先にくつゝいて居る。栗毛蟲は構はずに置けばみんな葉を骨ばかりにしてまふ。兼次の兄の太一が毎日長い竹竿で其栗毛蟲を落して居る。栗毛蟲は強くしがみついて容易に離れないのを太一は氣長に叩いて落ちたのを足で踏み潰す。太一は此を近來の役目のやうにして飽きもせずにやつて居る。兼次には男の兄弟が三人もあつたのだ。一人は十になるかならぬで鬼怒川で溺死をした。其次は此の太一である此も十位の頃から癲癇になつた。病氣が屢起つてから彼は只ぼんやりとしてしまつた。病氣の起る間が遠ざかれば時としては木の根を掘りに行くこともあつたり一日かゝつて米の一臼位は舂くこともあるが、何處でぶつ倒れるか分らないので殊にお袋の心配は止む時がない。彼は人さへ見ればにや〳〵と笑つて居る。彼は不具な體でありながら年頃來てからは草苅の娘などに戯談をいふこともあるやうに成つた。娘等は往復共にいゝ慰み物にして太一にからかふ。此を見てつらいといつて涙をながすのはお袋である。こんな不幸な出來事から家の相續をする者は兼次より外には無くなつたのである。其大切な兼次が浮かれ出したのだから非常な打擊であるといはねばならぬ。それがおすがのお袋が指金で此間の晩も垣根の所にうろついて

居たのはお袋がお安といふ女を連れて來て居たのだと思つて居るので親爺はもう心外で堪らぬのである。太一は五六日前に隣の五右衛門風呂で病氣が起つて踏板を踏み外して足のうらへ五十錢銀貨位の火膨れが出來たとかで變な歩きやうをしながら今日も落花と毛蟲の糞との散らばつた庭に立つて栗毛蟲を叩いて居る。彼はやがて其竹竿を入口の廂へ立て掛けてぼんやりと立つて此の掛合の後半を聞いた。さうして四つ又が持て餘して双方とも暫く無言であつた時に

「エヘヽヽヽ嫁さま貰つてやれ」

といつて脇を向きながらにやゝ〳〵と笑つた。竈の前に心配相な顔をして茶を沸して居たお袋はたぎつた湯を急須にさして上り框へ持つて來た。

さうして四つ又の前へ對して極り惡相にして

「太一、わりや默つてろ」

と叱りつけた。

「へヽヽおつかあ」

と太一は又にやゝ〳〵と笑つた。親爺は噺の途中から顔がほとつて來て目の玉まで赤くなつて居る。四つ又は暫くたつて又

「そんぢやどうしても今は貰あねえんだな」

といつた。

「どうしてもおら駄目だよ」

返辭は淀みがない。

「檢査せえ濟めば嫁の世話しても怒るめえな」

念を押す。

「怒らねえとも」

簡單だ。

「ようし齒を拂つて云つたな。そん時はおすがこと世話すつかも知んねえかんな」

四つ又はこんなことで此場は手を引いた。此の表沙汰の掛合があつてから十日ばかり經つて兼欠は親爺と一所に自分の家で働いて居た。卵屋は他人へ對しては恐ろしい意地も張りも强い人間であるが兼次がことゝなると大抵のことは忘れてしまふのである。四つ又は其所の呼吸を知つて居るので元の鞘へ收める役目は彼に丈は容易なことであつた。

五

おすがの家では又村の親族が聚つて智惠を絞つた。どうしても此は二人の間を離れさせるのが專一である。それにはおすがを隱すことだと博勞の伊作の考で村の親族の一人が引きとつた。唯の夜遊びでさへ村中押し歩くのだから兼次がおすがを嗅ぎ出すのは牡犬が牝犬を搜すよりも速かであつた。おすがはそれから見習奉公といふ名義で隣村の大盡へ預けられた。然し兼次が其大盡の邸内へ忍び込むだのはおすがゞ行つた其日の晩であつた。其晩兼次はひどい目に逢つた。傭人等が豫め兼次の來るこ

とを知つて主人へ窃に告げたのである。嚴重な主人は傭人に命じて庭の隅へ追ひつめさして捉へた。兼次は地べたへ手をついて謝罪つた。門の外へつき出されてほう〳〵の態で歸つて來た。娘と千菜物は其村の若い衆のものだといふ諺が古くから村には傳つて居る。維新の頃までは若しも他村の男が通つてゞも來れば其村の若い衆の繩張を冒したことに成るので散々に叩きのめして其土に和談の酒を買はせたものだといふ。それ程のことはもうないが今でも一つは嫉妬心から一つは惡戯半分から追ひまはすことは往々である。兼次が酷い目に逢つたのも傭人にこむな心持があつたからである。おすがも翌日暇が出た。遁にしほ〳〵として風呂敷包を抱へて歸つて來た。二人の間に就いては百方策が盡きた。遂に村の旦那へ持つて行くことに成つた。旦那といふのは祖先の餘慶によつて村の百姓をば呼び捨てにするだけの家柄である。大抵の出來事が愈埒明かなくなると屹度旦那の許で裁判を乞ふのが例になつて居る。兼次のことでは旦那も髯をこきおろしながら考へたがやつぱり困つた。卵屋の頑固は叩いて見なくても分つて居る。一先づ本人共の意見を聞かうと最初におすがを呼んだ。おすがはもう埒もない。離れたくないのは山々だけれど離れろといへばそれも素直にいふことを聽くのである。尤も旦那の家へ呼ばれて嘶をされるといふことは生來嘗てないことで只恐れてどうもかうもいふことは出來ないのだが眞實死ぬの生きるのといふ程の決心はないのである。おすがはまだ十七にしか成らぬ。次には兼次を呼んだ。

卵屋が又變な料簡を起しても困るからと内儀（カミ）さんの機轉でお安を使つて或日の書餉の仕事休みに裏庭へ連れ込むだ。お安はおすがと茶摘をして兼次を騷がしたことのある女である。お内儀さんは篤と譯を説いて、此所ですつぱり手を切つてしまふ決心はないかといふと

「わしやどうしても思ひ切れましねえ」

と彼は斷乎としていひ放つのである。お内儀さんも成程と困つた。

「それ程ならさうとして私も心配してやらうがお前の親爺もあの通りで兵隊前は駄目だといふのだが、幸ひ檢査も濟んでお前も輜重輸卒と極つたのだからもう先が見えてるんだ。其時に成つてからなら嫁の相談も出來るしそれまでの所の辛抱だがどうしたものだ。長いやうでも一年足らずだ。さうしてどこにも障りのないやうにしたらどうだ。

兼次も此には少し我を折つた。

「それぢやわしも其積りで辛抱して働きませう」

「さうかさうして呉れゝば仲裁人の顔も立つし、親爺の心も解けるといふものだ。愈それと極まれば双方へ兼次が思ひ切つたと表面嘶をして一先づ安心をさせるのだが、それには私が一應お前とおすがを逢はしてやるからそこで内實は決して心變りはしないといふ約束をしておくがいゝ。少し辛抱するうちには兵隊も濟むし其上でなら私らも共々心配をして屹度一緒にしてやるが、おすがゞ其間に辛抱が出來なけりやそれこそ夫婦になつても頼みに成らない女だから其時は未練はない筈だがどうだ兼次

さうではないかい」。

「さうでがす。なあに辛抱しらんねえやうな女ならわしうつちやつちめえまさあ」

「それでは私がお安を使つておすがを呼び出すやうにしてやるから其の時今いつたやうな手筈にしたがいゝ。其代り屹度辛抱をしなくつちや駄目だよ」

「辛抱するつて云つた日にやわしも屹度辛抱して見せますから」

兼次は元氣よく家の仕事をして居た。其頃は土用に入つて間もないのであつたが畑の大豆は莢が急に膨れる。青々とした稲草の根元まで暑さがしみ透つて鮪が死ぬといふ位で、百姓は晝は裸に絲楯を着て仕事をする。夜は裸で蚊帳の中に轉がる頃であつた。其日は丁度祇園祭の日であつた。地上には到る所に強い日光を遮る爲に重く深い綠が其手を擴げられるだけ擴げて繁茂して居る。其でも幾日雨の涸れた畑の陸穗は日中は悚へ切れずに葉先が萎れてしまふ。面倒な日が西の林に落ちた時にやつと日先を遮る一日の役目を果した草木は快げに颯々と殺きはじめる。それから幾十分の後に漸く百姓の暇な時間が來るのである。然し今日は祭の日であるだけに前日に仕事の一區畫をつけて遊ぶものは朝から遊むで居る。十五夜の月が強く青い滑かな夜の空を昇つて欅の木の梢からおすがの庭を照して居る。庭の柿の木は葉がきら〳〵と濡れたやうに月光を浴びて居る。空は見るから凉しげであるが一日照りつけた太陽のほとぼ

りはまだ蒸してどこの蔭へ行つても怵へられぬ程である。かういふ時はどこの家も開け放しである。おすがの家は煙がこもつて其煙が廂を傳はつて靜かな夜の中へ彷徨つて行く。晝間から呼ばれて來て居る村の親族が四五人で此の喉のつまるやうな煙の中に坐つて酒を飲んで居る。家のものは忙しく動いて居る。今祭の餡飩を打つて居る所なのだ。男は裸である。女も襦袢一つである。竈の前ではおすがゞ餡飩を茹でゝ居る。釜がぶうつと泡立つてこぼれ出すと大急ぎに手桶の水を一杯注ぐ。泡は忽ちに引込む。茹だつた餡飩は又手で揚げて手桶へ入れて井戸端へ行つて冷たい水で曝して「しようぎ」へあげる。「しようぎ」といふのは極めて淺く作つた大きな籠である。籠といふよりは笊の大にして淺きものである。

井戸端で少し暇どると餡飩を裁つて居る男があとが出來たと怒鳴る。こんなことでおすがには少しの隙もない。其竈の煙が家一杯にこもつて居るのである。お安が兼次を連れておすがを誘ひ出しに來たのは此時である。兼次は竹藪の蔭へ潜ませてお安は用のある振で行つて見たが全く隙がない。兼次は我慢をして居ればよいものを蚊には螫される。足には痺れがきれる。もどかしく成つて遂そこらをうろついた。其姿をちらりと家のものが見た。兼次ならどうも飛でもねえことだと、熬豆をかじりながら餡飩をすゝつて居た親族のものはさつきの酒がまはつて居るので下駄を穿いて出だすもあつた。お安が折角やきもきしても此夜は目的を達することが出來ずにしまつた。内儀さんはそれでは自分のうちへ呼んで

逢はせるやうにでもしてやらうといつて居ると二三日たつて兼次はおすがの家で捉まつたといふ噂がはやくも聞えた。内儀さんの苦心もなにも滅茶々々に成つてしまつて事件は又もとへもどして了つた。

「なんちい馬鹿たんべえなあ」

とお安はいま〳〵しがる。外の人々は腹が立つといふよりは呆れて物がいへなくなつた。

其うちに笑止しな出來事が起つた。祇園が過ぎてから十日ばかりたつてからである。或朝親爺は

「兼、今から仕度しろ、われ見てえなものはおらぢへは置けねえからどこへでもうつちやらなくつやちなんねえ、一緒に行け」

と親爺は兼次を連れて出た。お袋は餘りの突然なことにあとで獨りで泣いた。晝近くなつて兼次はひよつこり歸つて來た。どうしたのだと聞くと境街道へ連れられて二三里も行くと

「われがことはこゝでうつちやんだ。境へ行くなら此れ眞直だ」

といつて小遣錢をくれて放されたのだといふ。それで親爺の姿が林の角に隱れた時に自分は林傳ひに先廻りをして來たのだといつた。

お袋は仕方がないから暫く親類にでも厄介に成つて居ろといつて自分の巾着をはたいて兼次を出してやつた。親爺は晝過になつて歸つて來た。お袋は

「おら兼こと可愛いからあとで泣いたよ」

とつくづくいつた。此のお袋が今日まで家内に風波を起さないのはおとなしく我慢をして居るからなので嘗ては怨みがましいことをいつたことは無かつたのである。

六

此の事のあつてから幾らもたゝぬ内におすがの姿も村には見えなくなつた。兼次が連れ出してしまつたのである。能く〳〵聞いて見ると此もおすがのお袋が一つで旅費までやつたのだといふことだ。彼等は兼次の叔父が聟に行つて居る栃木の在へ辿りついた。叔父は國元へ手紙を出した。返事は至極簡單で只捨てゝ置いてくれとあつた。さうかといつて其儘にはおかれぬわけで叔父は遙々相談に來た。然し卵屋は前段の始末で手のつけやうがない。それから村に居た時分に懇意にした博勞の伊作の處へ行つたがおすがの家でも親族や兄が不服なので駈落するやうな不埒なものはもどすことは出來ないといふことであつた。叔父もそれでは自分が暫く預つて置くことにする外はないと兼次のことに就いては深い骨折をしてくれた四つ又にも逢つて此後とも一切の心配を賴むといふやうに云ひ置いて三日ばかり暇どつて歸つた。叔父のもとでは二人は甚だ愉快な月日を送つた。雜木林を借りて木の根を掘り起してそこへ作つた陸稻をたべた口には栃木在の米は實にうまい。おすがの家には土藏までゐるがそれでも日常は石臼で挽いた麥を交ぜた飯をたべて居る。百姓の生

涯の希望は大抵鹽鮭を菜にして米の飯をくふやうに成つて見たいといふ以上はないといつてもいゝ位である。叔父の家は暮しがゆるやかであつたので彼等が口腹の慾を滿足させるには十分であつた。少くとも兼次には叔父が肉身であることゝおすがゞ一緒であることゝで薩張もう苦勞はなかつた。おすがは兼次について居るので幾らか肩身の狹い心持はするが辛いことはちつともなかつた。彼等は精一杯働いた。叔父も忙しい時に思ひ掛けぬ手が殖えたので窃かに悅んで止めておいた。秋がふけた。さうして稻刈の時節はなつた。故鄕では俎板へ鼻緒をすげたやうな「ナンバ」といふものを穿かなければ刈れないやうな深田もあるが、こゝでは草履穿きで稻刈が出來る。田の中で稻扱をする。仕事がどれでも愉快

である。赤城の山に雪が積んで冬が來た。其時彼等二人の間にはぎつとして居られぬ心配が湧いた。其心配といふのは改まつてのことではないが此頃に成つてどうにもしやうがなくなつたのである。駈落する以前からおすがは身持に成つて居た。おすがも初は我慢をして居たが此頃では體が兎角太儀になつた。叔父も疾からそれは知つて居るが百姓をするものは明日分娩する其晩まで跣足で仕事をする位のことは普通であるのだからそこは少しも苦勞はないのと一つは愈々腹がかうだからといふ時に返してやらなければ彼等雙方の家で仲々引きとるのに故障をいふだらうといふことでおすがには成るたけ樂な仕事をさせて止めて置いた。冬も寒が來て田甫の榛の木には春の用意に蕾がふら〳〵と垂れはじめた時にもう

こゝらでいゝと思案をして叔父は二人を返してよこした。博勞の伊作へも手紙をつけ又四つ又へもこまゝ〳〵と自分の筆の立つだけは書いた。其は自分が行かねば濟まぬわけだが、かういふ日蔭ものを連れてのこゝ〳〵村へはひることも極りの惡いことだによつて二人だけ返すのだがどうか惡く思はないでどんなにでもいゝから心配をして貰ひたい、後で卵屋が愚圖々々いふにはわしがそこは引きうける、若し只今にも自分が行かねば駄目といふなら葉書をくれゝば直にも飛むで行くからといふのであつた。二人はどこへも手賴る所がないので四つ又の家へ轉がり込むだ。四つ又も困却したが乘つた船で止むを得ない。先づ伊作へ談じて見たがどうも唯ではおすがも戻れない。思案の末におすがの家の前の仙右衞門へ

少しの間といつておすがを賴んだ。一つは仙右衞門の家は廣い割合に少勢であるのと一つはすぐ前のうちへ置いたならば朝夕おすがの姿を見るうちには兄貴もさう六ケ敷ことばかりもいはれなくなるだらうしお袋が愚圖だから誰も因業もいつては居られまいといふ見込をつけたのである。おすがの身の處置をつけて四つ又は卵屋の方へ手を出した。四つ又は隨分此の事件では厄介な役目であるが、四つ又でなければ出來ないと村からいはれて居るのが心中窃に自慢なのである。或晩遲く彼は卵屋へ行つた。此頃は毎日村のどこからかとん〳〵と箱篩の音が竹藪を洩れて聞える。田舍の正月が近づいたので其用意に蕎麥や小麥や蜀黍の粉を挽くのである。卵屋でも此晩蕎麥粉を挽いてる所であつた。お袋は顏から衣物か

ら埃のやうに粉を浴びて筵の上で箱篩の手を動かして居る。親爺は癲癇持の太一と二番挽の糟を挽いて居る。四つ又はくゞり戸開けてはひるとすぐに石臼へ手を貸した。石臼はぐるぐると輕くめぐる。

「寒い思して態々節挽の傭に來たやうなもんだな」

と四つ又は笑ひながらいふ。

「當てにもしねえ傭が出來ておれは此れだからうめえな」

と卵屋も相槌打つて勢よく然かもそろ〳〵と石臼をめぐす。暫くで蕎麥の糟は全く穴へ搔き込み畢つた。石臼は其儘幾つかごろ〳〵とめぐして此れで蕎麥挽はやめた。お袋は箱篩の手を止めて上り框の冷え切つた火鉢へ粗朶をぽち〳〵と折り燻べた。煙が狹い家に薄く滿ちた時に火鉢へは燠が出來て煤けた鐵瓶がちう〳〵と鳴り出した。

「構はねえで篩つておくんなせえ」

と又四つ又はお袋へ挨拶する。

「篩ふなあしたでもえゝでんがすから」

とお袋は石臼臺の粉を桶へ移して筵を掛ける。親爺は裏戸口の風呂で暖まる。

「箆棒に寒い晩だなどうも」

と又四つ又は火鉢へ手を翳す。

「雪がちら〳〵して來たから寒い筈だ」

と卵屋は湯から出て土間で褌をしめながらいつた。さうして

「茶よりや蕎麥搔でも拵えろな、腹あつためるにや蕎麥搔の方がえゝや」
といふと
「蕎麥搔はえゝな、そんだが鰹節はなにか土佐節か」と四つ又は啄を容れる
「へゝたえしたことといふな、何處で聞いて來た」
「どこつておら土佐節でなくつちや喰つたことあねえんだ」
百姓の家に松魚節のあらう筈はないのである。四つ又はこんなことでそろ〳〵戯談から口火を切る。鐵瓶の湯が沸つたのでお袋は二つの茶椀へ箱篩から附木で蕎麥粉をしやくつて移す。鐵瓶の湯を注いで箸で搔き交ぜる。お袋は小皿へ醤油を垂らして出す。

「こら餻飩粉ぢやねえかあんまり白えな」
「四つ又もちつと眼がチクになつたな。そりや一番粉で糟がへえらねえだ。甘かんべえ」
「うむ、ずうつとかう喉からほか〳〵して來たな」
蕎麥搔の茶椀へ湯を注いで四つ又はふう〳〵吹きながら飲んで愈々噺を持ち出した。
「おれが云ふことはもう聞き飽きたんべ、おれも呆きれた。そんでも此んでも聞いてもらあなけれやあなんねえんだ」
「又兼が噺か、その噺ならしねえでもれえてえ」
「それからおれが聞いてくろうつていふむだよ。おすがの腹がえかくな

つて今落ち相になつて歸つて來たんだが、どうも此までとは違つてこんだあ捨てゝ置けねえこつたから向の親類でも困つてんだ。おすがも五六日こつち小便も近くなつたといふんだから今夜にもあぶねえんだ。それがうちへ寄せられねえんだから今出來る子供の產す場所がねえ譯なんだ。此所のところはまあどうしたもんだな」

「どうするつておら駄目だよ」

「まあよう考えて見てくんねえか、自分の息子が人の大事の娘を引張り出して隨分世間へも外聞を曝して揚句の果が孕ませてそれでこつちゃや嫁に貰ふことも出來ねえが、趣意もつけられねえ腹の子供がどうなつてもえゝつて云ふんぢや向の身に成つても隨分酷かんべと思ふんだな」

「趣意なんざあ文久錢一文でもおら出せねえよ。向で欲しけりやおら兼の野郎呉れつちやつて構あねえ。おら相續人なんざあ外から養子したつてえゝと思つてんだ。おら旦那にいはれたつて聽かねえから駄目だ。旦那に怒られて村に居られなくなりや居られねえたつて構はねえんだから」

「酷くわからねえんだな」

道の四つ又も遂にはむつとしてかういつた。卵屋はもう目の玉まで火のやうに赤く成つて居る。

「そりやおれ惡るかんべえ。惡くつたておらさうかたあ云はねんだから、どうぞおれげは其噺はしねえでくろ」

といひながら火鉢の向へごろりと轉がつて何とも返辭をしない。胸に

は激しい動悸が打つて居る。豆ランプの薄闇い光が其燃えるやうな顔をてらして居る。四つ又は手持不沙汰にして居たがやがて裏戸口から小便に出る。雪はいつの間にか地上一杯に白くなつて外は薄明くなつて居る。厩の側には落葉が堆く積んであつて其上にも雪がさら〳〵と微かな音をさせて白く積りつゝある。馬は人の近づいたのを見てがさ〳〵と敷き込んである落葉を蹈みつけながらッ、ッ、と懐しげに鼻を鳴らして馬塞棒から首を出して吊つてある飼料桶を鼻づらでがた〳〵と動かして居る。お袋は四つ又の後から出て

「どうぞ悪く思はぬえでおくんなせえ。本當にいつでもあゝだから困んだよ」

「思はねえにもなんにも、ありや癖だから」

「そんぢやえゝがなあ」

といつてお袋は少し躊躇して

「さうとあの兼は煩ひでもした樣子はあんめえかねえ」

「なあに眞ッ膨れに肥えて來たからなんにも苦勞するこたあねえよ」

「おらあまあ獨りで心配なんだよ。眠つても眠れねえことがとろつ日だよ」

「困つたもんだよ本當に」

四つ又は火鉢の前へもどる。さうして

「ッァ、」

と一聲大きくいつて

「おれも三春へ行つて見てえ積だが、こんだ行く時にや一緒にすべえぢやねえか。豚も醤油粕が高くつて困つてる所へ四掛や五掛の相場ぢや割に合はねえからな」

かういふと卵屋はむつくり起き上つた。

「本當に行くんぢやあんめえ」

「本當だよ、駒なら草だの藁だのばかし食はせてみつしら使つて二三年もたてばたえしたもんだな」

「四つ又でも三春へ行つちやあ目うつりして買ひめえと思ふんだ」

「戯談いつてらそんなことにやおくせは取らねえんだぞおらなんざあ」

「あぶねえな、豚の手にやいかねえから見ろよ」

噺はいつか賑かになつてさつきの不機嫌もどこへか行つてしまつた。

「それぢやどうしても兼こたあうつちんだな。おら今夜はどうでもかうでもうむと云はせべえと思つたんだが當が外れた。雪で歩けなくなつちやつまんねえからおら歸るぞそんぢや、兼次はうつちやるんだな」

「兼が一人で歸るならおら今が今でもゝどすよ」

「うむさうかわかつた」

こんなことで此場は濁したが四つ又もおすがの身の振方には困つた。博勞の伊作とも相談をする。兎に角急場凌ぎの策をとらなくては成らぬことに差追つた。其頃仙右衛門とは道一重向隣の綽名を松山といはれて

居た家があつた。何か事情があつて家族を連れて他へ移住をすることに成つて家から持地からおすがの兄貴に賣つて立ち退いた。その空家で產をさせるのが妙案だといふので兄貴へ渡りをつける。ところがなか〳〵承知しない。ごつたすつたやつてたうとうそれぢや自分等へ少しのうち其家を貸してくれろといふのでやつとのこと納得をさせておすがを松山の家へ入れた。仙右衞門も近所の儀理で澁々おすがを厄介して居たのだから重荷を卸したやうな心持がした。四つ又もあとはどうでも先づ目先の才覺が首尾よく運んだのでほつと息をついた。

七

おすがは女の子を產むだ。他には介抱の仕手もないのでお袋が公然朝から晩までつめ切つて世話をする。嫂も行つて粥でも煮てやるといふわけで有繋に兄貴も見て居られぬといふことになつた。四つの又策略はすつかり其圖に當つた。おすがのもとへは兼次もいつか入りこんだ。さうして松山から買つた畑を讓つてもらつて自分の喰ふだけの働きをすることにまでなつた。赤子は笑ふやうになつた。只さへ少し愚圖なお袋はもう可愛くて迚ても手放すことが出來なくなつて、二人が仕事に畑へ出れば自分は子守をして居る。赤子が泣けば畑へ抱いて行つて乳を飲せる。おすがの兄貴も忙しい仕事の時には兼次を連れて來て働かせるといふやうに成つた。雙方の間は理窟なしに睦ましいのである。斯くして時日は

經過した。然し時としては村で口の悪いものは、

「兄貴も餘まり構はねえから仕やうがねえ。どうも兼次をあすこへ入れて置くといふのは卵屋の顔を踏みつぶすやうなものだ。あれぢや仲人が幾ら立つても噺の屆かねえな無理もねえ筈だ」

と噂さをすることはある。旦那のお内儀さんも或時四つ又に向つて

「あの兼次が一件だがね。お前方の指圖で松山のうちへ入れたんだ相だがどうもあれが卵屋では必外に思つてるらしいんだがね。此はお前方にも不似合な計らひだと思ふやうだがまあ一體どうした譯なんだね」

「どうもさういはれるとわし等は誠に悪い者に成る譯なんですが、あの時は全く今夜にもあぶねえといふ腹なんですから始末に困つて一先づまあさうしたんです。卵屋は兼次がことは全くの處呑んででもしまひてえ程可愛いんですがわし等がいふことを聽くとおすが等が方に負けたことになるといふ意地づくなんですから仕やうがねえんです。意地づくでは死んでも負けられねえといふんですからね。それ程可愛い息子のことなら諦めがつき想なものですが息子は可愛いし先は憎いしで理窟をいはれればごろつと寢てしまあんですからわしも手古摺つたんですよ。初めは兵隊が濟めば嫁を世話しても苦情はねえことに念はついたんでしたが今ぢや餘ンまりこゞらけたんで云ひ出すことも出來ねえんです」

四つ又は頭を掻きながらかういふのである。此も無理のない理窟だ。おすがのお袋の料簡を聞いて見ると此は單純なものだ。

「四つ又へ頼んでおくんですから何とかして呉れんでせうが本當に困つたもんでさどうも」

こんなことに過ぎない。

「赤んぼはそれでも丈夫かい」

といふと。

「へえ兼によく似てまさ」

平氣でいつて居る。おすがの親爺に此ことを話すと

「世間は角を立てゝはうまく行きませんよどうも。お互に丸く行くことでなくちや困りますよ」

こんなことで濟んでるなら人が共々心配をする必要はないのである。

それから兄貴へ

「あの一件も困つたものだな」

といふと

「困つたものですよ」

といふから

「お前もあゝして二人を引きつけて置くのでは迚ても埒明きやうはないからお前もおすがを捨てることにしてそれで他から拾ふといふことにしたらどうにか示談が出來相なものだと思ふがどう考へて居る」

斯ういふと

「わしは決してうちへは寄せねえといつたんでがす。實は松山のうちへ

わしが夜は泊りに行き〳〵したんですが毎晩も行つてらんねえから時々お袋等が泊りに行くこともあつたんでがす。さうするとお袋なもんですからおすがも孤鼠々々はひり込むやうに成つたんでさ。それでもはじめはわしこと見ると遁げたんですから。兼次もわしに捉まつた時二度と決して足踏はしませんて證文張つたんでがすわし今でもちやんと持つてまさあ。そんだからわしはうつちやつた譯なんでがす」

「いやうつちやつた譯でも二人のことをお前の家へ仕事に使つたりして居るのでは駄目ぢやないか」

といふと

「忙しい時はほかゝら手もねえもんでがすからね」

どれを叩いてもちつとも要領を得ない。

おすがは自分の思つた男とお袋の膝もとに居るのだからちつとも心に苦勞がない。兼次も好いた女と世帶を持つて女の家の貢ぎをうけて居るのだからこれも苦勞はない筈だが唯親爺が出逢がしらに短氣を起しはせないかといふ懸念があるばかりであつた。それも今では安心が出來た。或日のことである。田市でばつたり親爺にでつかはした。親爺が手織木綿の小ざつぱりした絆纏を着て首へ風呂敷包を括つて居た。兼次はぎよつとした。それでもこちらから

「ツア、何處へ行く」

と言葉を掛けたら親爺は微笑しながら

「うむ、糸染めによ」

といつすた〳〵行つてしました。かういふ間に始終ひとりで氣を採んで居るのは兼次のお袋である。親爺が短氣を出すから少しも喙を容れずに我慢して居る。相手になるのは癲癇持の不具者ばかりである。一目見たい孫も表向き抱いて見ることも出來ない。人に賴んで兼次へ衣物をやつたり汁の身の葱や大根をやる位に過ぎぬ。

「おら一日でも思ひ晴々としたことはねえんだよ」

と十九夜講で女房達の落合つた時には遂ひ洩れることがあるのである。

「おらまあほんにあれがこつちや「ッァヽ」に隱してなんぼ足袋刺してやつたか知んねえんだよ。氷つた所をぢよりヽ〳〵押し歩いちやあ足袋も草履も一晩しか持たねえんだよ」

聽き手があればしみ〴〵とこぼした。村の同情は此のお袋一身に集つた。事件の推移はこんな風で卵屋が業を養やすことのある外表面甚だ平靜のうちに時日が經過して行く。

世間は復た春が蘇生つた。鬼怒川の土手の篠の上には白帆を一杯に孕むで高瀬船が頻りにのぼる。船頭は胡座をかいた儘時々舵へ手を掛けただけで船は舳がぢやぶ〳〵と水に逆つてのぼつて行く。冬の辛さがこゝで一度に取り返されるので此の南風の味を占めては迚ても職業がやめられぬといふ時節である。篠の中には鳥馬（テウマ）がそつちへこつちへ移りながら下手な鳴きやうをして菜の花から麥畑へ遊びに出る。兼次は此時輸卒と

して召集された。本來ならば自分の家からほろ酔になつた人々に送られて鬼怒川の渡しへかゝる筈であるのだが彼は變則にも其假住居から立つて行かなければならぬことに成つた。其朝彼は自分の家の近所へだけは暇乞に出た。其態度は狼狽して居た。隣の家では土間へ置いた汁鍋がひつくりかへつて居たので不審に思つて居たが、あとで兼次が隣のうちの「バケツ」を引つくりかへして來たといつたのを聞いたのでそれが兼次の仕業であつたといふことが知れた。有繋に勘當を受けて居る身であるだけに落つかれぬのだらうと人々は噂をした。此の外には一つも話頭に上ることはない。麥が刈られてさうして椋鳥が群をなして空を渡る頃兼次は歸つて來た。村のうちには毎日麥搗く杵の響が大地をゆすつてどこかに聞える。兼次は其麥搗の一人に成つた。麥は夜中から搗きはじめて朝になれば各八斗の量を搗きあげる。椋鳥はしら〳〵明に西から疾風の響をなして空を覆うて渡る。さうして夕陽の沒する頃西へかへる。空を遙かに飛ぶ時に麥搗は杵持つ手の右と左を持ち換へながら今日も日和だと叫ぶ。椋鳥が少なくなつて稻刈になつた。刈田の跡の水のやうな冷たい秋が暮れて又冬が來た。鶸がよわ〳〵した羽をひろげて切ない鳴きやうをして林から刈田を飛びめぐる。さうして寒さは又小春にかへつて人人は岡の畑に芋を掘つて居るのである。

短い日は村の林の梢に棚引いた土手のやうな夕雲に眞倒に落ちつゝある。横にさす光は麥の葉をかすつて赭い櫟の林が一しきり輝いた。畑の

へりの茶の木の花は白々と光を帶びて居る。筑波山は見る〳〵濃い紫に染まつて來た。秋の末の晩稻を刈る頃から夕日のさし加減で筑波山は形容し難い美しい紫を染め出す。百姓に聞いて見れば嘗てそんな筑波山は知らぬといふ。知らぬといふのは尤ものことである。日が落ちて殘曛がなほ明かな數十分間は彼等の仕事が尤も捗どる時である。晩餐の仕度をするために女等は今どこの畑からも一人づゝ立つて行く。女等が去つてから百姓の手もとが漸く薄闇きを感じた。頰白が淋し相に桑の枝を飛びめぐる。百姓は自己以外には頓着なしにせつせと芋を俵へつめて居る。兼次はおすがゞ歸つてから車へ俵を積んで引き出した。田甫を越えて坂へ掛つた時には少し積み過ぎた芋俵は彼の力には餘つた。ほつと腰を延して居ると突然後から

「それ〳〵うんと力ンで見ろ」

といふ聲がして車が急に輕くなつた。坂の上で振り返つて見たら芋俵を馬に積んで來た兼次の親爺が持つて居た手綱を放して後押してくれたのである。

「誰だと思つたら「ッァゝ」か」

と兼次は心の底から嬉し相にいつた。馬は獨りで勢よく右の方へぱか〳〵と走つて行く。親爺は馬のあとから駈けて行く。兼次は腰をくの字に屈めながら足に力を入れて左へ曳いて行く。村の竹藪から昇つた青い煙は畑の百姓を迎ひにでも出たやうに幾筋も棚引いて田甫から岡まで屆

かうとして居る。其時黄昏の中を百姓は田甫から相前後して歸つて來る。何處ともなく鳴がきゝと鳴いて去つた。百姓の後姿を村の中へ押し込んでやがて夜の手は田甫から畑からさうして天地の間を掩うた。　終

おふさ

刈草を積むだ樣に丸く繁つて居た野茨の木が一杯に花に成つた。青く長い土手にぽつ〳〵とそれが際立つて白く見える。花に聚つて居る蟲の小さな羽の響が恐ろしい唸聲をなしつゝある。土手に添うて田が連る。石灰を撒いて居る百姓の短い姿がはらりと見えて居る。白い粉が烟の如く其の手先から飛ぶ。こまやかな泥で手際よく塗られた畦のつやゝかな濕ひが白く乾燥した田甫の道と相映じて居る。蛙が聲の限り鳴いて居る。田の先も對岸も皆畑である。畑は成熟しつゝある麥の穗を以て何處までも掩はれてある。麥の穗は乾いた土の如くこまやかに見える。桑畑が其間にくつきりと深い綠を染め拔いて居る。さうして村々の森がこむもりとして畑を限る。遠い森は麥の中に沒しつゝある如く低く連つて蒼く垂れた空に强い輪廓を描いて居る。鬼怒川は平水の度を保つてかういふ平野の間をうねり〳〵行くのである。ヤマベを啄む川雀が白い腹を見せつゝ忙し相にかい〳〵と鳴きめぐる。ひらりと身を交して河原に近い淺瀨の水を打つて飛びあがる。午時を過ぎた日の光を浴びて總ての物が快く見える。髮結のおふさはいそ〳〵として土手を北へ一直線に歩きつゝある。中形の浴衣の上には白い胸掛を掩うて居る。おふさが此の土手を北へ通ふ時は乾度器量一杯の支度である。白い胸掛は見るからはき〳〵として小柄なおふさを三つも四つも若くして見せた。油や櫛や職業に必要な道具の小さな包を左に抱へて右に蝙蝠傘をさして居る。普通人に異つた枯燥した俤がないではないがおふさに心配は見えない。土手を北へ通ふ時

おふさの顔は晴々しい微笑を含むで居るのである。小娘でもするやうに肩の蝙蝠傘をくる〳〵と廻す。おふさは廿六である。短い道芝の間に白い足袋が威勢よく運ばれて行く。土手の果には鬱然たる森が有つて其森から手を出した樣に片側建の人家が岸に臨むで居る。川はぐるりと左へ曲折する。それで三四の白壁が遠くから河岸を陽氣に見せる。廻漕店の前には土手の下に高瀨船が聚つて居る。土手を斜に削つた坂には高瀨船へ積み込む米俵が順序よく轉されつゝある。あたりには土管やら空な酒樽やら雜多の物品が廻漕店の庭へ續いて土手の往來を狹くして居る。おふさは蝙蝠傘を蹙めて人足の間を過ぎた。惡戯好な人足共はおふさの後からぶつ切つた樣な短い詞で揶揄つた。然しおふさの耳には何にも感じな

い。さうして足早に歩き出して向の理髮床の店へはひつた。おふさが遙々と長い土手を通ふのは此の店があるからより外に何等の理由も想像されぬ。店には五十近い女房と一人は廿位な一人は十四五の娘とで働いて居る。男の職人は交らない。おふさは女房と顔を見合せて唯あどけなく嫣然とした。さうして髯を剃らせて居る客の後から姿見へ自分の姿を映して又嫣然とした。器量一杯の支度を映して見ることがおふさには非常に嬉し相である。おふさは蝙蝠傘と包とを網を吊つた棚へ乘せた。女房も他の二人も白の仕事衣を覆うて居る。それが痛く汚れて居る。おふさは小娘の肩をそつと叩いて、糊付けた自分の胸掛を一寸抓むでそれから小娘の仕事衣を抓むで喉の底から搾り出す樣な妙な聲を出して又あどけ

く嫣然とした。小娘は

「えゝよ、何でもおほきなお世話だよ」

と振り捩る樣に體をゆすつて、危げに使つて居た剃刀の手を止めて一寸舌を出して見せた。おふさは揶揄ふ樣なあまえる樣な態度で又妙な聲を出して嫣然した。

「そんなことするもんぢやねえ、お民は」

此も剃刀を使つて居た娘のお道がたしなめる樣にいつた。お民は

「さうだよ、本當にえゝんだよ」

おふさの方を向いてかういつた。女房は頻りに剪の音をさせながら櫛で抄ひあげる樣にしては髮の先を少しづゝ斬つて居る。目をしかめつゝ

一心に剪を使つて居る。暫くして理髮を畢つた小學校の敎師らしい客が棚の荷物を抱へて立つた。おふさはしげ〳〵と客の顏を見る。客は店先の柱に吊つた籠の雲雀に一寸目を注いで軈て去つた。洋服に下駄を穿いた後姿が姿見の向へ遠くなつて外れてしまつた。おふさは敎師の後姿を見て居たが又喉底から搾り出す樣な聲をさせて女房が忙し相な剪を止めてこちらを見た時自分の頰を撫でたり、敎師の後姿を指したり、さうして拇指を出したりした。主婦さんは頷いて見せた。おふさの態度はそはそはとして來た。

「あの先生ことゞうしたもんだい」

お民は白い布を折つて竿へ掛ながらいつた。

「さうなもんかえ。庄さんに似て居るつていふんだぞ、少しえゝ男を見りやかうやつて拇指を出して騒ぐんだもの、庄さんが氣にばかり成つて居るんだから」

お道はいつた。さうして

「さうだなあおつかさん」

女房の方を向いていつた。

「庄さんはそんぢや罪だな」

お民はませたことをいつた。

罪だ〳〵と人のいふのを聞いて居てお民は口眞似にいつたのである。

おふさは水槽の蓋を開けて見て水が無くなつたとお民へ手で知らせた。

お民がぼんやり立つてゐるのでおふさは手桶を提げて立ち掛けた。女房は

「お民、々々」

と急に叱るやうにいつた。お民は引つたくるやうに手桶を取つて往來を横ぎつて走つて行つた。土手の降口でぐるりと裾をかゝげた。其姿が土手の下へ隱れた時おふさも往來を横ぎつて走つた。さうして川を見おろして立つた。理髮床の店からは川の水は見えない。對岸の村が淺い木立の緣をかぶつて、それがおふさの立つて居る往來の端とくつゝいて見える。木立の間に隱見する二三軒の障子が目に立つ。川の曲折したあたりから水は竪にしら〳〵と遠く見え渡る。おふさが辿つて來た土手も靑く

一目に走つて居る。其遙かに先から今白帆が二つ上つて來る。白い番の矮鶏が土手の下からおふさの足許近く表はれた。鶏冠にくつゝく程一杯に背負つた尾が軟風に吹かれてひら〳〵と動く。甲走つた聲で雄鶏が鳴いた。後へ反つて嘴を開いて小さな喉が裂け相にして二聲三聲鳴いた。さうして又白い尾をひら〳〵と吹かれながら矮鶏は土手に隱れた。土手の中腹の青草を足で搔いては餌を求めて歩くのである。お民はのぼつて來た。手桶を土手の上り口へ置いて手を掛けた儘太儀相にして一寸休息した。おふさはお民へ片手を貸して手桶を運んだ。其間土手の往來はがたくり馬車が蹄に埃を蹴立てゝ過ぎた。荷物を山のやうに積んだ車が行つた。人が通つた。走るものは一瞬間止まるものは永久に疎末な姿見の鏡裏に其形體を印する。往來が途絶えた時鏡裏は平靜である。唯尤も近い入口の柱に吊つた籠の雲雀のみは茶椀の粟をこぼしつゝ逆立つた頭の毛を天井の網に突き當て〳〵もがいては絶えず鏡裏に活動して居る。水槽の水が滿ちて更に川から手桶が運ばれた時おふさはバケツに雑巾を浸して水槽からさうしてそこゝらを拭いて歩く。おふさは又一隅に吊つてあるランプを外して見る。ホヤの曇りを拭つて心を出して見て剪を入れる。さうしてランプを以前の釘に掛けて手の臭を嗅いで見る。

「本當にえゝや、助からあ」

お民は斯ういつて石鹸を出してやつた。おふさは石油臭い手を洗つてそれから顔を洗つて又姿見へ自分を映して惚れ〳〵と見る。

「よつぽど庄さんには焦れて居るんだなあ」

お道がつく〳〵と見ていつた。暫く途切れた客の後から一人の男がずつとはひつて來てどつかり椅子へ腰を卸しながら

「おゝ髭だ」

胴間聲を出していつた。

「おゝ髭だ」

とお道はすぐに眞似をして

「大層威張つてどうしたもんだえ」

と笑つた。男は首筋を椅子へ凭れさせて微笑して居る。日に燒けた顏がてら〳〵と光つて見るから丈夫相な男である。紺の筒袖で無造作に三

尺帶を締めて居る。一杯に開けた胸には毛がふさ〳〵と生えて居る。彼は高瀨船の船頭である。彼は其ばり〳〵した髭面へ刷毛で石鹼を塗られたにも拘らず、おふさへ何か手眞似で揶揄つた。おふさは何と合點したのか變な僻んだ顏をして指を二本鼻の下へ當てた。

「そうら二本棒だつて云はれてらあ、默つて居ればえゝのに」

お道が船頭をたしなめる樣にいつた。彼は又何かいはうとしたが剃刀持つたお道の手が唇を押へて居たので聲が出ない。

「剃刀で切つちまあぞ、饒舌(しゃべ)くると」

皆がどつと笑つた。おふさの顏は又晴々とした。

「此の衣物はえゝ柄ぢやねえか」

お民が羨まし相にいつた。

「みむな出入の所から貰あんだとよ、本當にえゝやな」

お道もいつた。

「そんなに欲しけりやおれが呉れてやらあ、亭主にうつちやられたら尋ねて來る方がえゝや」

「八釜しいよ、又はじまつた」

二人は斯ういつて又どつと笑つた。此の店へ來る客の多くは船頭や人足や百姓等である。此の地方に特有な粗暴な言語が絶えず交換されるのでかういふ應答も少しも不思議に思はれて居らぬ。おふさは姿見の後へ引つ込むでぐるりとかゝげた裾を外して帶を締め直してさうして又店先

で茫然として往來から遠くを見渡して居る。女房の客は髪が刈り畢つた。白い布が毛だらけに成つた儘そつと解かれる。おふさはふとそれを見ると女房の手から其白い布を取つてぱさ〳〵と毛をはたく。女房は小さな布を前へ一寸掛けて客の口のあたりを濡らす。それから剃刀を合せて切味を手の平で試しながら椅子の側へもどる。

「此女はこりや何だい、唖かい」

卅五六の髭のある其客が聞いた。横柄らしい、税務署の官吏でもあらうかと見える男である。

「へえ唖ですがね、旦那は知らねえむでしたかね」

「うむ、俺は知らむ」

「能く此所へ來るんですがね、こゝちぢや知らねえものは有りませんせ」
「さうか、尤も俺はまだ此所へ來て二箇月だからな、それで此の女はどうかしたといふのか」
客は先刻からの傍の噺に釣り込まれて居たのでおふさに就いて聞き出した。女房は左のモミアゲを剃り落して剃刀の返しを使ひながら
「これでも一度は亭主を持つたんですがうつちやられたんでさ、それで自分ぢやさうは思つて居ねえんですからね」
「どこだい、まあ此の女は」
客はまだ戯談半分の態度で聞く。女房は剃刀に氣を取られて半は氣勢の抜けたやうに語る。

「此の川西なんですがね。お袋が放埒でね。お袋の亭主に成つたのが酒屋者で越後から來て居て婿にはひり込むだんだといふ噺でしたね。わたしは別段能く知りませんがね。此が又猫の樣におとなしいんだつていふむですから、それでまあ嗅が增長したんですね。藏では親方株に成つ居たつちうことだが、旦那等は能く藏のことは知つてる筈ですが杜氏とか何とか云つてましたね。それで働いちや持つて歸るのを留守に成ると飲んだり打つたりといふんですからね。亭主もまさか男だから怒らねえこともねえんでせうけれど、そこらの處は知りませんがね。なんでも亭主は苦勞性なんで酒が心配で內へは滅多に歸れねえで居るもんだから、いゝ幸にしちや男を拵へてねえ、此の啞が出來ていかく成つてからさうだつ

ていふんですから、それでいゝ年をして自分の息子の様なねえ床屋の職人と巫山戯てからつきり値はねえんですよ。そんなんだから亭主は此がね餘ッ程大きく成つてからだといふんですが出つちやつたんですと、そこへ行くと身元の知れねえ遠國者は思ひ切が能うがすかんね。それでもまさか子供は可愛いから手當にするんだつて拵へた財産は置いて行つたんですと、私は能く知りませんがね。それで床屋の職人だつて身持は能くねえしお袋も幾らか外聞を考へたんでせう、手を切る積に成つたんだけれど唯ぢや職人がうんと云はないんです。それで酷いんですね、店を持たせるからつて此の啞をくつゝけてまあ此所へ店を出したんですね。其頃は内がどうにか成つたつていふ噺ですが、此は廿四でさね其時にね。此はいゝ者持つたと思つて一所懸命でさね。其うお袋は死んちまめえました。飲むだのが障つたのに極つてまさ。職人は庄さんていふんですが、さうなりや何でこんな啞なんぞう守つて居るもんですか、茶屋女を受け出してね、此は家へ暫くやつて置いて筑波向へ行つちまつたんでさ、それでも此はうつちやられたとは思はねえんですから……。

剃刀は顎を滑かにさうして徐ろに走る。女房は顎を大事に抱きあげるやうにして自分の首を曲げて剃刀を動かす。おふさは此の間手拭竿の手拭をもみ出したり、流しを洗つたり、毛屑を掃いて見たりちよいちよいと手を動かして居る。お道の手が明いて客が少時途切れた。おふさはお道を姿見の後へ導いた。棚の包をとつて髪結の道具を出す。鐵瓶の湯を注

いで毛の癖揉をはじめた。船頭も姿見の後へ腰をおろして暫く新聞紙をがさつかせて居たが横に成つていつか眠つてしまつた。

「何でもうつちやられた時は泣いて〳〵ひどかつた相ですね。獨ぼつちではほんとに不便なものでさね。さういつても近所隣といふものも身内といふものもあるし世話はした相ですがね。仕やうがないから亭主が仕込んで置いた髪結をやらせることにした譯なんですね。剃刀の使ひ方なんざまあ一寸は出來るやうに仕込むで置いたもんだから今ぢやたいした役に立つて此もいつて見りや亭主のお蔭ですがね。さうすると三月ばかり經つてひよつくり亭主が歸つて來たんでさうしたらもう離れつこなしなんです。それをどう騙したか甘く騙して又行つちまつてね。何でも貧乏で暮しが出來ねえから遠くへ行つて稼いて來なくつちや成らねえんだとね稼いで錢が溜つたら歸つて來て復店で働くんだからお前も稼いで待つてろとねかう呑み込ませたといふむですが私も深いことは知りませんがね。さうなんでせうよそれからといふものは一所懸命に錢を溜める料簡に成つてる容子なんですからね。初のうちは皆可哀想だつて餘計な賃錢をやつたり衣物なんぞ呉れたりして面倒見たんですがね。此の浴衣だつて貰つたにや相違ねえんです。それが駄目なんです。亭主がね時々來ちや騙して巾着をはたいて持つ行つちやあんですからね。亭主が困るから來るんだと思つてるんでせう、それから持つてる丈はみむな遣つちまあんでさあ。そんなこつたから亭主も極りが惡くつて村へは行かねえで途

中へ呼出しを掛けてさうしちや二三日遊んで行くんです。それが知れてからといふものは皆錢はくれても本人に持たせねえやうにして置く相ですよ。それで此の店で復た稼ぐんだと聞かせられてからは時々かうして來ますがね。朝のこともあるし、今日のやうに晝過に成ることもあるし、來ちやそつちこつち掃除して行くんですから内の子供等は助かる譯ですがどうで駄目なことを本當に思つてるんですから不便なものでさね。亭主ばかり一心に成つて居て片輪者といふものは仕様のないもんでさね。他人が何と敎へて見た所で本當にしませんし、揶揄つたら面倒だしそれよりか嬉しがるやうなことに仕向けた方が當り障りがありませんからね……。

女房は語り續ける。

「そりや何かい、亭主といふ奴はどんな奴か知つてるかい」

客も此度は釣り込まれたらしい。

「それがね旦那、其亭主は庄さんていふんですが仲々いゝ男でね、一寸お世辭もいゝし、つきあつちや惡いことはまあ有りませんよ。此店だつてね隨分やつて行けるんですが、身持が修らねえで——尤も此頃はお上で八釜敷から打つことたあ止めたやうですが前々からサガリもそつちこつちあつて居憎いも居憎いんでせうしね、それにおんなじものなら口の利ける者の方がいゝに極つてますからね。戯談には片輪者は情が深過ぎて困るの、それに何故だか冷たいから厭だのて庄さんはいつてる位なんで

すからね。それでもまさかに可哀想だと思はねえことも無えんでせうし一人ぼつちなのも知つてるんですから、うつちやつて心持のいゝ筈はねえからまあ一つは容子見に來なくても居られねえんでせうね」

「然し錢を擢つて行く處は酷い奴ぢやないかな」

「それがね旦那、屹度庄さんは此店へ顔出しちや行くんですが、みんなに揶揄はれて弱る時もありますよ。遁口上だか知れねえが庄さんがいふのには錢を貰つた方が本人は上機嫌だし、こつちには惡くもねえし、却つて兩爲めだから預つて置くといふんですが、さうはいふものゝ庄さんは惡い人間にや見えませんね。まだ精々三十三四でなか〳〵捨てたもんぢやありませんよ。全く過ぎるものゝ亭主ですから、餘り過ぎた亭主もよしあしでさね」

剃刀は頰のすべてを反覆して走つた。女房は剃刀に氣を取られて無遠慮に饒舌る。ぞんざいな仲間を日夕相手にして居るので全くぞんざいに成つて居る。おふさは元結の端を絲切歯で嚙み切つた。

「なんでも思ひ出しちや此處へ來るんでせう。掃除をして置いて亭主に譽められたい一心ですからね。さうしちやかうして器量一杯の支度をするんですからね。洒落るといふことは他人が教へなくつても獨りで知つてるから恐ろしいものですよ。尤も饒舌らねえのだから解らねえといへば解らねえやうなもんですがね」

女房は更に

「どつちにした處で生殺で罪は罪でさね、旦那」
と最後の一句を續けた。白い布が胸から除かれた。
「旦那洗ひませう」
客は長い時間から椅子を離れた。客は滑かに剃られた顔を拭きながらふと姿見の間から、長火鉢の側で髪を結うて居るおふさを見た。
「仲々これはうまいもんだな」
銀杏返が一つの髷を形られた。
「悧巧ですからね。此で口が聞ければたいしたもんだが惜しいことに……」
女房は椅子に倚つた客の髪を綺麗に拭き取りながらかういつた。さうして

「何時でも來ればかうしてみむなの髪を結つて歸るんです。其代りね、金鍔を髪結錢位と思つて買つてやるんですが、それがどれ程いゝ心持なんですかね、其の嬉しい容子を見ちやなんでなくつても買つて遣るのが惜しかありませんね。どうも不自由なせゐか子供見てえな處がありますからね。なんぼなんでも當り前なら廿六にも成つて金鍔位ぢやそんなに騙されやしませんからね」
といつた。高瀬船が一艘ついたと見えて白帆が一つ土手にくつゝいて止つた。大きな白帆は遠い野を掩うて姿見へ大きく映る。白帆は力なさ相にぐつたりとする。帆綱が解かれたと見えて白帆はくた〳〵に成つて更

にすつと下つた。こつうんと丸太を投げた樣な響が土手の下から近く聞えた。すつと立つた檣を殘して姿見には復たすぐに川がしら〳〵として土手が青々として村から野から一杯に映る。鏡裏の雲雀が止まず動いて居る。客の髪は油をつけて幾度となく櫛を入れられた。女房は白い布をとつてぱさ〳〵と襟のあたりを叩いた。客は一遍顎を撫でゝ姿見を見て立つた。女房は茶を汲んで出す。暫く客が途切れた。突然に半ば頭を剃り殘した六つ位の小坊主が泣き〳〵驅けて來た。入口の柱のもとで頻りに雲雀の籠へ屆かぬ手を延しては地團太踏んで泣きわめく。婆さんが一人あとから走つて來て小坊主を抱へようとする。小坊主は婆さんの手にはおへぬ。雲雀は驚いて羽叩きして騷ぐ。店の者は皆笑つた。

「そらおまはりさんだぞ」

と婆さんは威す。小坊主少は泣を沈めた。おふさは髪を結ひ畢つて一寸店を覗いた。さうして女房へ妙に手眞似をする。何か子供にくれてやれといふのらしい。女房は唯頷いて見せる。小坊主は漸く婆さんに引かれて行つた。

「此れで子煩惱ですからね」

と女房は客へいつた。

「廿六だといつたかな。それにしては若いな。口が利けたら相應に騷がれたんだらうな」

「氣味が悪いから手出しはしませんね。それに今ぢや亭主の氣にばかり

成つて居るから尙更のことでさね」

「此店は何時越して來たんだい。大分繁昌だな」

「もう二年ですよ。私も內は三四里あるんですが妙な事でしてね。親方が放埒なもんですからね。餘計者を引きずり込むだりしちや私も面白かあ有りませんからね。到頭こちへ分れたんでさ。借家でしたが今ぢや庄さんから道具一式讓られたんですからもう大夫丈でさ。弟子もね、女の子の方が扱ひいゝもんですからみんな女ばかしにしてね、此で結構やつて行けますから」

「女ばかりだからまあ感心なものさな。それでも今は親方と往復はあるのかい」

「なに時々來ますがね、八釜敷ことばかりいつて仕樣がねえんでさ、とつくからもう喧嘩するやうなことはありませんがね。いゝ年しちや獨の方がいゝ位なもんですよ。口論したいことはねえんですがね、あんまりだと我慢出來なく成りますからね、それでも駄目でさね女の方が惡いとしかいはれねえんですから」

女房はぼさ〳〵した顏で煙草を吸ふ。

「それでも私は子供が一人ありますからね。えゝさうです男です。あと一年で卒業ですから電信局へ勤が出來るんです。此までは私も一心に成つて送りました、それ一人が手賴ですからねかういつて火皿へ紙を押込むでぐりつと廻して烟脂のついた紙を火鉢の隅へ棄てゝ詰つた羅宇をふ

うと吹いた。

「こんだお民結つてもらへ」

女房は呶鳴つた。客は

「いや、おほきに」

と横柄に挨拶して出て行つた。

おふさは稍膨れた包を抱へて鬼怒川の土手を歸りつゝある。上機嫌の容子があり〳〵と見える。膨れた包は金鍔である。それをおふさは大事相に抱へて居る。おふさの心は的確に知る由はない。密封した箱に小石や木片や硝子の破片や雜多の物を入れて此をがら〳〵と振る時に中なるものが小石であり木片であることを其一つが想像しえたとしても全部を知ることは能はぬであらう。おふさの心はそれである。おふさに對する何人の想像も確かであるとは斷言が出來ぬ。然しながら此の土手を通ふ時は平生の僻んだ容貌がなくなつて唯そは〳〵と快げである。靜かに考へる時は皆おふさを哀だと思ふ。逢うて語る時は皆笑つて揶揄ふのである。それが孰であるにしても亭主の噂を聞かされることが非常におふさには快く見える。卅は女の頽齡である。其卅を眼前に控へた身を以ておふさはあどけなく土手を往復する。南風が軟かに且つ涼しく野茨の花に吹き渡る。透徹せる蒼い天は此の青年の如き地上の草木を保護するためガラスの蓋を掩へるが如く見える。野茨の花の開く數日間が一年の内に

於て尤も爽快で且つ四圍が不安の念を起させない時期である。太陽は此の大地を暫時も離れ去ることを惜むもの丶如く暮れ兼ねて躊躇して居る。此の如き間に在つて麥の穗のみは悲しい色を浮べつ丶ある。萬物に活力を與へて強く照らす日の光に堪へ兼ねるもの丶如く麥の穗は焦げたやうに黃變しつ丶行くのである。日の射し加減でまだ青味を含んだ麥の穗に其俤をほのかに浮べる。斜に渡る日の光は更におふさのあどけない頰をしげ〳〵と覗いた。

教師

此の中學へ轉任してからもう五年になる。子供が三人出來た。三人共男ばかりである。此の外には自分に何の變化も無い。依然として理化學の實驗を反覆して居る。自分は一體褊狹な人間なのであらう、同僚ともそんなに往復はない。田舍の教師抔といふものはてんでみじめな情ない人間が聚合して居るに過ぎない。俸給の不足だとか同僚に對する嫉妬の惡評だとかいふことを能く口にしたがる。それを聞くのが自分には厭なのだ。然し生徒は好きだ。自分は邊幅を飾らない。髮は三分刈と極めて置く。髭なんぞは立てたことがない。それで生徒も最初のうちは自分の風采が揚らないので少しづゝ輕蔑しかけたものもあつたが現在ではみんなが能く服從してくれる。教授上に忠實を心掛けて居るのが自分の唯一の誇りである。中學の教師は比較的時間の餘裕を有して居るのだが、それでもやりやうによつて仲々忙しい。暇を拵へては釣竿擔いで出懸ける同僚もあるんだが、そんな餘計なことはしなくてもいゝだらうと思つて居る。斯ういふ連中は能く泣き出さないばかりに生徒に苛められる。それといふのもみんな自分が惡いのだ。中學の教師は又よく更迭する。此所では大分新陳代謝が行はれた。然し彼等に對する自分の記憶は甄のやうなものだ。殘つて居るものは味噌でいつたら滓ばかりだ。だが唯佐治君ばかりはいつ迄經つたとて到底自分の腦裡を去らぬであらうと思ふ。どうかすると長身瘦軀の佐治君が涙を落しながら椅子に倚つて居る容子があり〳〵と見える。何の力が自分にかういふ強い印象を止めたのであ

らうか凝然と考へてゞも見ようと思ふと却て解らなく成る。佐治君は哲學科出身の文學士である。社會學を專攻したのだといつた。佐治君は何時でも底深く沈んで居るやうな態度で其長い體をぐつたりと二つに折つて椅子に倚つて居る。さうして目を瞑つて居る。佐治君の髪はどんな時でも能く櫛が入れられてある。洋服でもすつかり體にくつゝいて居る。固より其周圍は極めて清潔で且つ整頓されてあつた。佐治君はそれで獨身の生活をして居たのである。自分には彼の凡てが能くさうされたものだと不審に思はれる位であつた。だが佐治君には毫もハイカラな分子は交らない。自分の性格は全く佐治君とは相反して居た。どうしてか自分は放任的でテーブルの上でもごつちやである。教室でもよく試驗管を壞すので會計の方でぐづ〳〵いひたがる。書記の今井君は別段懇意だから小言が餘計に出る。内へ歸つてもさうだ。惡戯者ばかりだから障子は何時も穴だらけだ。自分は近頃寫眞といふ道樂を覺えた。少しの餘裕がある と器械を擔いで出掛ける。寫眞をはじめてから滅切忙しくなつた。學校の方を疎略にすることは自分の主義に反して居るからだ。道樂といふと語弊があつていかぬが自分が寫眞を始めたのは理化學の應用といふことに興味を持つたからである。自分は不器用だから碌なものは出來ない積ではじめたのだが近來は少しは美的思想も發達して來たやうに感ぜられる。世上に發表された有らゆる印畫がどうも自分の製作を越えて居るものが少いやうに思はれて來た。自分は近傍一二里の間はどんな小徑でも

跋渉して見た。能く散歩に出た同僚が又かといつた樣な眼で自分を見るのに出會つた。だが途中で佐治君に一回でも逢つたことがない。佐治君は滅多に外出しないのである。下宿の婆さんがいふのに教頭が時々訪ねて行く。其時は屹度碁を打つ。碁を打たなければ讀書をする。さうして机へ肘を懸けて唯ぢつとして何だか考へてばかり居る。それは優しい人だがちつとも打解けないので氣が置けるといふことであつた。自分は訪問が嫌だから二三遍佐治君と往復したに過ぎぬ。下宿屋の婆さんは自分が嘗て妻を喚ひ寄せる間暫く居たことがあるので途中で遭つても婆さんは話しかける。自分には碁を打つやうなそんな悠長なことはとても我慢がしきれぬ。自分は疎放な人間である。だが此でも教育者の義務といふことを知つて居る點に於て誰にも劣らないといふ自信を有して居る。卒業生の貧乏な者の爲めには有力者に說いて學資を出させて置くのがある。五年居るうちには地方の父兄に知人も出來てる。それで自分は教育者の義務を果すのには一所に長く在る事が第一の條件だと思つて居る。此だけは佐治君に愧ぢない積である。佐治君は在職一年で九州へ去つてしまつた。其短い一年間自分は一緒に生徒の監督をした。それで相互に意見を交換する必要と機會とがあつたのだ。其短い間に必要から尤も相接近したので佐治君に就いての觀察も怠らなかつたのである。佐治君の瞑想に耽つて見えるのは哲學を研究して居る者に通有な狀態だと思ふから格別不審にも思はなかつた。だけれども下宿屋の婆さんがいつたやう

に何處かに狎れ難い處があつた。無頓着な方の自分にさへさうだから他の同僚の多くは日々の辭令の外に隻語をも交さなかつた。佐治君は生徒に讀者の多い中學世界へ青年訓といつたやうなものを始終書いて居た。書くことは眞面目だが內容は自分を甚だ感服せしむるに足るものがなかつた。佐治君はまだ大學を出たばかりである。生徒としての經驗はあつても教師としての觀察はまだ淺い。自分のやうに十年實際に臨んで居るものゝ眼からは徹底しない處があつた。或時雜誌の方から自分へも寄稿を依囑して來て報酬のことまで書き添へてあつた。それで筆を執れば原稿料を得られるのだといふことも知つて居た。佐治君は其報酬によつて收入の幾分を增して居るのだといふことも勢ひ想像された。佐治君は他の類似の雜誌へも寄稿して居たのである。報酬を欲するのだらうといふ想像が微かに佐治君の人格を疑はしめた。自分はどうかすると酷く此の疑を深めて佐治君に對して輕侮の念を起すこともあつたが、面前に其沈んだ姿を見る時はすべてが消散してしまつた。佐治君は迚ても憎むべき人でなかつた。佐治君の人格を疑つた自分の不明は後に至つて深く悔いた。佐治君は他人の談笑することがどんな心理狀態に在るのか解釋の出來ない即ち光明の方面には寸時も其心を住せしむることの不可能な人なのである。

其頃同僚の一部に惡戯が流行した。特色のある連中は大抵犧牲に供せられた。惡戯の發頭人は自分と書記の今井君とである。自分は到底活動

せずには居られない人間なのである。今木君といふのは尊大なので同僚の冷笑を買つて居た。生徒の父兄が面會にでも來ると反身に成つて控室を出る。それが滑稽なので時々擔いてやる。今井君は器用な性質なので父兄の文字をそつくり眞似して名刺を拵へる。それを小使に持たせてやる。さうすると今木君は例の如く出て來てはそこらを彷徨ついて極り惡る相にしてもどつてしまふ。其容子を見たいばかりの惡戯なのだ。今木君は怒るかと思ふと怒りもしない。といふのは今木君は酷く生徒に苛められる仲間なので免職になつたら明日から糊口にも窮するやうな肩身の狹い人間だからだ。さう思ふとそんな惡戯をするのは罪なことなのだが其頃はそれが行はれた。そんことは今では止んだが其頃は暫く續いた。

書記室へ行くものは自分が居たら書記の今井君と二人で冷かさずには措かなかつた。だが佐治君に對しては今井君も一言を發することも出來なかつた。佐治君が其弱々しい瘦軀を靜に運んで來ると今井君の態度が急に改まつて畢ふ。側から見て居ると滑稽な位であつた。自分はこんな巫山戯たことをしても責任は全うするに足るべく十分の勉强を繼續して居た。佐治君は英語を擔當した。英語は生徒に甚だ趣味あるものではない。それで佐治君に就いて生徒は所謂鹽加減を見はじめた。佐治君は生徒を威壓する樣な人ではない。生徒は與し易いやうに思つて居たらしかつた。丁度二學期の初に就職したのであつた。天長節の式場で佐治君は演說した。其聲は低かつたが徹底して自ら人をして傾聽せしめた。生徒は感に

打たれた。自分も演説の上手なのに喫驚した。能く聞いて見るとそれも其筈で佐治君は熱心な基督教の信者である。日曜日の演壇に立つたことも數次であつたのだ。

時候は漸く寒くなつた。ガラス窓の外には櫻の枯木が空つ風に搖られて居る。ベース、ボールの選手が乾燥したグラウンドに各自其膂力を振つて居る外屋外に人を見ることが少くなつた。ストーヴの側には何時でも數人づゝ職員の或者が雜談して居る。ストーヴは慥に佐治君と自分とを接近せしめた。自分は教育上に就いて佐治君と語つたさうして意見が能く一致した。自分は同僚の大部分が教育に就いて何も考へて居ないことが癪に障つて居たけれど佐治君に遭ふまでは沈默を守つて居た。自分は教師といふものは換言すれば畑の南瓜位なものだと思つて居る。悧巧なものは餘り無いものである。此の二三年間には大分更迭があつた。去つたものは成熟した南瓜がもぎとられた樣なもので後任者は蔓の先へ膨れた青い南瓜だ。どうも段々教師の値打が下落して行くのだから仕方がない。免職になつた奴はてんで腐つて落ちた南瓜なのだ。自分はこゝで忌憚なく所信を發表すれば校長無用論を唱道する。大きな一室を占領して毎日何をして居るのか聞いて見たくなる。それで南瓜の熟したか熟しないかも分らずに居る。自分は百姓の家に生れたから能く知つて居る。西瓜にした處で庖丁で裂いて見なくつたつて指の先で彈いて見れば出來たか出來ないか屹度知れる。校長は箸へ挿して喰はせて見なけりや南瓜

の味が分らないのだから困る。それが證據には校長會議など、大袈裟な場所へ出て何を齋したか。旅費日當の遣ひ殘りで細君の土產を買つたつて教育上の成績には成るまいぢやないか。金錢が欲しけりや寧ろ教育者を止めてお店の番頭になるがいゝ。前垂掛けた方が餘程增だ、とかういふ風に横道へ外れて自分は遠慮もなく饒舌つた。いつも佐治君は能く聞いて呉れるので自分は思はず興に乘じてしまふことがあつた。佐治君の沈んだ低い聲は自分に壓せられて畢つて自分のいふが儘に聞いて居なくては成らなかつた。自分の罵倒が劇しい時佐治君は少し困るやうであつた。さうして自分が金錢が欲しけりや商人になれといふ時にはどういふものか佐治君は顏を赤くするやうに見えた。ぐつたりとした體が更に俯向くやうに思はれた。自分は異樣に何物かゞ佐治君の心裡に伏在して居るのぢないかとも思つた。或は金錢を談ずることの野卑なのを羞ぢるのではないか思つたので、それからは金錢に就いては餘りいはぬやうにして居た。

西風が總ての梢を吹き拂つて、更に木の葉が地物の一隅に聚合して居るのを見出しては執念く搖き亂して居る。猶子鳥（アドリ）や鶸が木の葉の如く西風に吹き飛ばされんとしつゝある。自分は此種の渡り鳥が殘酷なかういふ風に吹かれる爲めに何を求めて態々此地に來たであらうかと疑ひたくなる。裸に成つた樹木は各特有の姿態を現はして廣濶な平野に人目につき易く突つ立つて居る。寫眞道樂の自分には絶好の季節である。滿地の綠

が目に美しい時は寫眞道樂の冬である。寫眞には色彩が出ない。光線が我々の眼底に落つるのと乾板の上にレンズを透す時とは其現象が違ふ。乾板は餘りに鋭敏で又遲鈍である。明暗の度が強過ぎる。それでどうも現在の寫眞術に於ては我々は冬の木立が撮り易いのである。寫眞狂の連中は寫眞を繪畫と拮抗させる、美術の範圍に進めると力ンで居る。又寫眞は到底駄目だと排斥して居るものもある。自分にはどうでもいゝ。自分が面白く感じて居ればそれで滿足なのだ。缺點は幾らもある。除き去るべき必要はある。又早晩除き去られねばならぬのは勿論である。それは自分等の責任でもなければ義務でもない。自分等は唯器械を擔いて歩いて居ればそれでいゝのである。冬は一切の動物が萎縮する。同僚にも散歩するものを見なくなつた。佐治君には固より逢はない。自分は一枚でも滿足な種板が欲いので短い時間を節約して冬と甚だ親密に成つた。街道を挾むで赤楊の枯木がすく〳〵と立ちならむで居る。街道の傍に一區域をなして菜畑がある。周圍に青いものは其畑だけである。青菜は軟かに見えるけれどそれがどうしてもさびた冬の色である。荷馬車が悠長に赤楊の間を過ぎて行く。自分はかういふ處へ出ると原板に映せしむべき形體の外に色彩の美といふことを感せずには居られない。佐治君は恐らくこんな處を見たことはないのだらうと思つた。佐治君は強ひてゞも散歩の趣味を養つたならば虛弱な身體を健康に向はしむることが出來るだらうと思つた。自分は勸めて見たが佐治君は默して頷くのみである。

或る日曜日であつた。自分は思ひ切つて遠くへ出て見ようと思つて生徒を二人ばかり連れて出掛けた。田甫のあたりをぶらついて居るうちに西風が吹き出した。日光續きの山の上に泥の塊を戸板へぶつゝけた樣な雲の浮んだ日は屹度後に西風が吹くのであるが其朝は心付かずに出たのが失策であつた。寫眞はもう駄目になつたので折よく來掛つた馬車に乘つてもどることにした。馬車は止つた。八人乘の馬車へはもう六人詰つて居る。生徒の一人を歩かせねばならぬ。自分は一寸困つた。さうすると端に居た小豆色の頭巾を冠つた女が

「窮屈なのはお互ですよ、一人位どうかなりますわね、構ひませんお乘んなさいよ」

さうして

「みなさん少しお詰めなすつて下さいな」

客の方へ命令でもする樣にいつた。少しの空席が出來たので生徒も漸く乘ることが出來た。自分は女に會釋した。

「いゝえあなたどう致して」

と女は輕快である。馬車は田甫を越えて麥畑へ出る。乾燥した麥畑は埃の爲めに霧が立つたやうである。とある村で馬車が止る。御者は馬の口をしめす。同時に向からも一臺の馬車が來て立場の前へ止つた。立場の婆さんは煙草盆を出してそれから九人前の茶を汲んだ。頭巾の女は。

「さあ皆さんどうですか」

と左の手に盆を持つた儘敷島を出して膝の上の煙草盆から火を點けた。みんな茶椀が盆へもどつて五厘の銅貨が一つ宛茶椀の底に落ちた時女は帶の間から二錢の銅貨を出してんぽと盆へ載せて

「はいお婆さん下げておくんなさいよ」

馬車は復た埃の立つてる中を軋りはじめた。棒のやうに眞直な街道の傍には桐の枯木が暫く續いて其下にはぽつ〳〵立つて居る枯菊が切な相にゆらついて居る。處々の桑畑には白い糸のやうな桑の木が立つて居る。桑の木のうらには小鳥の止つたやうに落ち殘つた枯葉が二三枚づゝ着いて居る。其枯葉を烈しい西風が吹き散らさねば止むまいと絶えずゆさぶつて居る。遠くの林は空に吹き立つた埃の爲めにぼんやりとして居る。

反對の方向へ他の馬車も動き出した。馬車は黑い塊の如く段々埃の中へ小さく成つて行く。女の卷烟草の灰が自分の顏へ五月蠅くかゝる。女は漸く氣がついて

「まあどうしたんでせう、本當に濟みませんね」

女はいきなり吸ひかけの卷烟草を捨てた。煙草は道の端へさうして畑の方へ吹き擢はれながら微かに煙を立てる。馬車は其の煙に遠つてずんずんと走る。

自分は此の日目的の獲物はなかつたけれど天然の變化に對する興味を以て失望することはなかつた。桑の枯葉や女の捨てた卷煙草の烟をも見遁さぬやうに注意力の加はつたことを自覺して快感を禁じ得なかつた。此

の日は又自分に嘗てない人間に對する興味をも感知した。車中の女――小豆色の頭巾をかぶつた其婀娜な女でなかつたならば、其女がいつたのでなかつたならばそれでなくても窮屈な八人乘の馬車へ更に一人を乘り込ませることを他の客は肯じなかつたであらう。自分は女の勢力といふものをつく〴〵と感じた。自分の見る處では女は何處かの酌婦でなければならぬ。尤も嫌な階級の女である。然しどういふものか車中では其女に對して自分は毫も惡感を催さなかつた。のみならず後に至るまでさうである。自分は其女のはさ〳〵した仕打のために愉快であつた。あばずれた女であるに相違ないことは知つたけれど自分の感情は其爲に損はれなかつた。自分はどうして其女が自分の心を捕捉したかを不審に思つた。自分の心は其時平生の權威を保つに足らぬ大なる缺陷を生じて居たのだ。徒歩の覺悟であつたならば三里の道程は自分等三人に於て素より何でもないのだ。馬車に乘らうとしたのが自分の心を其時薄弱なものにして畢つたのだ。馬車を止めて乘らぬと斷つてしまふことともちと決行し難い。さうかといつて生徒を殘さねばならぬ。自分獨り歸り去ることが自分に苦痛である。それで自分は困つた。馬鹿げたことであるがそれが吐嗟の間である。思案の餘裕はないのだ。意外にも婀娜な女が自分を滿足させてくれた。自分は感謝せざるを得なかつた。女は自分の心の缺陷に投じたのである。それから其の車中に在つた短い時間が女を自分の眼に映せしめた總てゞあつたのと小豆色の派手な頭巾が顏の面積を狹くしたのとが惡感

を起させる動機を與へなかつたのであらう。それから頭巾といふ派手な色彩が又惡感を未發に防いだに相違ない。頭巾は女の顔の惡い部分を除却した。自分は寫眞と同じことだと思つた。レンスを透して原板に映ずる物象、單に其物象だけに就いて自分等は發見することに苦心して居るのである。原板に映ずる以外のものがどんなであつてもそれは構はぬ。レンスが肉眼より重寶な所はそこだ。素人に寫眞を見せると屹度此は何處だと聞く。何處だつてそんなことを聞く必要は無いんだ。素人は屹度それに極つて居るけれども撮つた寫眞は見せたくなる。それでさう聞かれると一寸癪に障る。變なものである。とかういふことを自分は考へた。考へることは自分には滅多ならず無いことだ。此も佐治君の感化であつたかも知れぬ。淺薄なことを考へたからとてそれは自分だけに仕方がない。自分は埃の立つ麥畑さへ興味を發見する樣に成つたのを衷心悅んで居る。さうして佐治君にも天然を味はしたいと思つた。佐治君は一度も天然を語つたことが無い。自分は女に逢つて種々なことを考へて見てから其女に對する追憶に興味を持つやうに成つた。獨身の生活をして居る佐治君が果して女といふ者に對してどんな思想を懷いて居るかゞ疑問に成つた。其翌日佐治君へ一日の始終を語つた。佐治君のいふ處は自分をして益疑を深くせしめた。悲觀が私の總てゞあります。花が開いても凋落の尋で來ることを思うて之を見るに忍びません。見ても何等の快感が起りません。それでありますから冬の天地程切實に私に悲痛の感を與へ

るものはありません。到底悲痛は私の全身を支配して居るのですといふのであつた。自分は落花の後に來る深綠や熾烈な日光の萬物を生育する無限の活力やさうして我々がそこに眼を放つ時に全身がむづ〳〵する程壯烈な感を起すことなどを主張して見たが佐治君は冷かなること石の如くであつた。車中の婀娜な女に就いて自分は大なる發見でもした如く其感想を語つた。佐治君は一言も發しない。遠い處を尋ねるかと思ふ樣に佐治君はしんとした。涙が胸で組んだカフスを滑つてストーヴに落た。熱した鐵板は直ちに其涙を蒸發させた。自分は意外であつた。其時自分は涙の蒸發したことにふと意を注いだことによつて僅に自分の心を外らした。佐治君は到底了解すべからざる人格である。いやそれが當然だらう。佐治君は哲學者たるべき人である。自分等が淺薄なことをいつて見たつてどうなるものか。自分は專ら自分の本領たる理化學の方面に向へばいゝのである。教育者としては佐治君と意見の交換もしなければならぬ。それ以上は僭越だ。自分は何故に理化學を選んだ。學資の缺乏から早く專門に向はなければならぬ事情もあつたのだけれど、空を論ずることが多岐多端に流れて單純な自分の性情が到底それに堪へることも出來ず、又それを好まなかつたからである。眞は唯一であるでいふことは天人の間に通ずる大法則である。理化學が尤も適切に之を說明し得る。そこがきびゝしして自分にはたまらず愉快だからである。自分の本領は涙がストーヴに落ちて蒸發することに意を留める處にあるのだ。無益な

ことはもう思ふまい。とかう心づいてから佐治君と接近はして居たが深く立ち入つていふことは無かつのである。

學年試驗も畢つて三十幾人の卒業生が送り出された。證書の授與式に臨んで校長の陳腐な演說があつた。一體此の中學の校長は體軀の矮小なのがみじめだ。何時でも狐疑して居るやうに人を見て居る。此が不快である。虛位を擁して居るのが人をして輕蔑せしめる。校長は嫌である。佐治君も演說した。青年に對する一片の訓示で特に奇拔なものではなかつたが其沈痛な低い聲が自分の胸を刺戟した。佐治君の人に强ふることの無い態度が自分を傾倒せしめた。其内に百五十人の新入生が皆釣合はぬ新調の製服をつけてぞろ〳〵と登校した。さうして無邪氣な顏をならべた。自分は此の少年に何物かを注入してやりたいと思つたから自ら請うて其一組の監督を受持つた。佐治君も新入生の組を受持つた。依然として佐治君との接近は保たれた。佐治君に對して居ると自分は何とはなしに曳きつけられるやうな心になつて、時には自分の心理狀態に疑を挾んで見たくなることもあるやうに成つた。然し疎放な自分の性格は改らなかつた。惡戲は時あつて行はれた。暑中休暇は其年から短縮されて九月に入ると直ぐに各教室は開かれた。自分は此の夏例の器械を肩にして鬼怒川の上流に溯つた。鬼怒沼山を攀ぢて雜草の中に淺く湛へた鬼怒沼を探檢した。周圍の樹林と雲霧の變化と皆乾板に映せしめた。さうして沼が鬼怒川と全く何の關係もないことを慥めて、陸地測量部の地圖の誤

であることを發見した。峽谷十里の間は自分をして天下の絶勝であることを驚嘆せしめた。關東の野に成長して比較的近距離で然かも坦々たる會津街道の通じて居るにも拘らず、今まで知らずに居つたことを自分は心に慚ぢた。未知の山水を發見して具體的に世間に紹介することの手柄であることを喜んだ。併し漸く自分は此の大なる自然は口徑二吋に足らぬレンズを以てして到底其の千百萬分の一をも彷彿せしめるこのと出來ないことを悟つた。人間が天地の間に介在して粟粒一つ攫へるのに生涯の努力を要するのだといふやうなことをも思はしめた。さうして此の峽谷を出る時其粟粒の千百萬分の一でもいゝから攫へて行かうと思つて改めて奮發の念を起した。三ダースの乾板を費し盡した。枯木ばかりが寫眞に適して居ると信じて居た謬想を根本から打破して峽谷を出た。それと共に自分の體力が意外に頑健であつたことを慥めた。兩手の日に燒けたのが自分にも目に立つた。授業の開始されたのは原板の整理がまだ畢らぬうちであつた。家に歸つて見ると原板は勞力と時間とを費したことの徒爾ならざるを思はしめるものがあつた。自分は自分の技倆を信じていと思つた。學校では博物の沼崎君が古い麥藁帽子をかぶつて學校園に其姿を曝して居る。佐治君は依然として石の如く瞑想に耽つて居る。佐治君を見ると自分は折角養ひ得た氣力が滅入る樣な心持がしてならぬ。自分の休暇中に於ける活動を誇つて見たい積であつたが、自分は控へてしまつた。それで佐治君が此の夏を如何に銷したであらうかといふ疑問

が起つたので自分は聞いて見た。一寸歸省しましたと極めて單純な挨拶であつた。佐治君は少し顏を赤らめた。此は佐治君の癖らしい。ぐつたりと萎れた樣な佐治君に其先を追求する念慮は起らぬ。自分は飽氣なく思ひながら過して居た。其内に書記の今井君から自分は佐治君が他へ轉任することに内決してあることを聞いた。在職が短日月であつたがそれだけでは自分には唯少しく意外に感ずる位であつたであらう。今井君は俸給の增額されたことをも語つた。自分は全く疑問を喚び返した。雜誌の寄稿者たる佐治君に對して消滅しつゝあつた疑問が卒然として復起した。教育者として漫りに金錢に拘泥することの陋劣なるを痛罵した時に、顏を赤らめた微かな事柄が火の如く自分の眼に映じた。此の休暇中に轉任の運動をしたのかも知れぬ。自分へ答へ能はなかつたのも内に疚ましきことがあつたからではなかつたらうか。自分は屢教育ある基督教徒の驚くべき墮落を耳にしたことがある。其記憶が一層自分をして佐治君に對して不快の念を增進せしめた。自分は勢ひ冷かなる眼を以て佐治君を見ない譯には行かなかつた。さうして淺薄な自分が果して絶對に金錢の誘惑を排斥し得るかといふことの反省もなかつた。又佐治君に對する惡感が甚だしき惡意でない嫉妬の念を加味して居ることをも自覺することが出來なかつた。自分は旅行することが好きである。興に乘じて人に語ることもある。然し人が興に乘じて自分へ旅行の噺をするにそれが同輩のものであつた時にはそれに釣込まれると共に心に一種の淋しさを感せ

ざるを得ぬ。自覺せぬ嫉妬の念に驅られるのである。榮轉する佐治君に對しても自分は獨り棄てられるやうなさうして名狀し難い微かな淋しさを感じたのである。當時自分に反省と思索との習慣が少しでも養はれて居たならば佐治君に對して自分の爲めに支配されるやうなことは無かつたであらう。轉任の噂があつてから一ヶ月過ぎた。其間路傍の人の如く冷淡であることを持續した。自分は悔いて愧ぢざるを得ない。

其頃はまだ惡戯は止まなかつた。數學の教師の大森君がフロックコートを新調した。今井君が洋服屋から探知したのである。狹い町だから何でも隱せたものでない。此の事實は自分等に絶好の材料を供給して且つ奇拔な考案を浮べしめた。今井君が小使に大風呂敷を持たせて大森君の家から其フロックコートを取寄せた。大森君の命令だといはしたので細君は何の氣なしに大きなボール箱へ入れた儘持たしてよこした。丁度自分の時間が二時間ばかり暇だつたので書記室で考案を凝した。大森君は職員中第一の肥大漢で、教授の時間でもボールドの前に立つて居るのを太儀だといつて止むを得ぬ外は椅子へかゝつて居る。又寛濶な日本服が着心がいゝといつて此まで決して洋服に成つたことがない。殊に夏は年齢の割合に禿げた頭からたく〳〵と汗を流して苦んで居る。其代り冬は滅多にストーヴの側に寄らぬ。脂肪に富んだ手を出してどんな時でも胼がきれぬといつて誇つて居る。大森君は比較的短軀なので袴を鳩尾の下で締めて居る。其容子が滑稽である。自分等は其體へ洋服を着せて見たい

といつてはよく揶揄つた。大森君はどうしてもだぶつかせた日本服を脱がぬ。椰揄はれる度に禿げた頭を手の平で叩いては抗辯する。然し式場に列席するためにはフロックコートの必要が生じた。といふのは大森君は漸次俸給を増して資格に相違を生じたからである。大森君は案外正直な人だ。自分等を驚かしたのは其ヅボンの太いことである。慥に自分の兩脚を容れて餘裕があつた。自分は小使に命じて何でもいゝからと短い棒を何本も持つて來さした。さうして兎に角胴腹や足の太いなりに組み立てた。特に腹へは新聞紙を卷いたりして其特色を發揮せしめるには容易ならぬ苦心を費した。自分は偶然の思付からフートボールの革袋をむいてゴムへ一杯に空氣を吹き込むだ。それへぐり〳〵と目や鼻や口を描いた。大森君の特色の一つである禿を誇張して髪を描いた。人の顔らしく成つた大きな赤い玉が落せば床板の上を跳ね歩いた。それをそつと据ゑた。さうして此の異樣な人物は書記室に隣した宿直室を獨り睥睨した。自分は成功すべき惡戯を滿足した。今井君が名刺を模造した。給仕が叮嚀に持つて行つた名刺は大森君を欺いた。大森君はおびき出す前に幾度か宿直室は視かれた。體軀に似合はぬ大森君はそゝくさとして居る。名刺を持つて何處だ〳〵といひながら書記室へはひつて來た。今井君はこんな時に澄し切つて居ることの出來る人である。今井君は宿直室に待たせて置いたからといつた。宿直室へ生徒の父兄を待たせて置くといふことは有るまじきことである。大森君は惡戯とは思はなかつたからうつかりガ

ラス戸を開けた。其處に異樣の人物は大森君を睨み落した。大森君が其癖の禿た頭を手の平で叩いた時自分は迚てもたまらなくなつて書記室を飛び出して仕舞つた。大森君は有繋に苦笑しつゝ去らざるを得なかつた。大森君が去つてからも書記室ではみんな腹を抱へた。自分はまだ宿直室を覗いた。突然書記室のガラス戸を開いて佐治君がはひつて來た。佐治君は何か今井君と語つた。今井君が自分を喚んだ時自分はびたりとガラスを閉てた。どうしたことか自分は惡事でも發見された樣に感じた。好い鹽梅に室内の惡戯は佐治君の目には觸れないやうであつた。今井君は先生が何か君に用がある相ですと自分を見ていつた。今井君は自分等に對する時は君といふのだが佐治君に對しては先生と敬稱して居る。佐治君は自分等のどこか落付かぬ容子のあるのが異樣に思はれたのだらう、お忙しいならば後程といつて去つて畢つた。佐治君が何で自分を態々尋ねるのか不審であつた。自分は佐治君に疎かつた。佐治君の心裡を肘度して惡意を以て疎んじたのだ。だが佐治君の悄然たる後姿を見た時には自分は何となく哀れつぽく懷かしい思がふと心の中に起つた。其の日の放課後に自分は惡戯に費した時間を塡補するために多忙であつた。理化學の教室で或る實驗に從事した。器械の裝置が畢つたので自分は椅子に倚つて暫く窓外を見た。沼崎君は襯衣一つに成つてホーレーキを擔いて學校園を歩いて行く處である。ホーレーキといふのは立鎌と熊手とを背中合せにくつゝけて拵へた農具である。近頃までかぶつて居た古い麥藁帽

子は棄てゝいつもの鍔のさがつた冬の帽子である。幾年たつたのか褪めきつて居る。帽子の形が茸の樣だ。今井君はすぐに赤ハッと綽名した。赤ハッといふのは初茸に類似の茸で此の地の方言である。夏が過ぎたら復た沼崎君は赤ハッに成つた。沼崎君がホーレーキを擔いて出るやうに成つてから雜草が除かれた。倒れかゝつたコスモスの花にも大抵杖が立てられた。コスモスの花は空に浮いたやうにふわり咲き出した。自分も小さな庭へコスモスを植えて置く。コスモスは白い花が一番目に立つ。赤い花は少し陰氣である。自分の庭のは學校のよりもいゝ。だが多數に在るのと遠くから見るのは學校園の特色で沼崎君の手柄である。給仕がそつと扉を開けてはひつて來た。實驗中はうつかりはひるのを許さないことにしてあるので給仕はよくそれを守る。何だと自分はぶつきら棒に聞いた。彼は佐治君が會ひたいといふことを告げるためによこされたのだ。それで忙しいかどうかと聞くのである。大森君などであつたらいきなりはひつて來るのだが、佐治君はそれだけ遠慮深い。自分は不審に思ひながらもすぐに來てくれと傳へてやつた。佐治君は靜にはひつて來た。自分は其綺麗に磨かれた靴が目に入つた。佐治君には閑雅な趣がある。日頃惡感を懷いて居たけれどからして面接して見ると自然と自分に畏敬の念を起させる。自分は從來濫りに人を敵視したる癖があつた。それで居て相手の方から折れて口を利かれると機先を制せられたやうで且つ自分が餘りに力瘤を入れ過ぎたことが妙に極りの惡いやうに感ぜられてこ

つちが却て閉口して畢ふ。佐治君に對しても受身になつてしまつた。自分は立つて椅子を讓つた。佐治君の人を畏敬せしめる態度は自分をして無意識にかういふ動作を起させた。然し佐治君は辭退した。自分は更に再三薦めた。然し長軀を屈して受けなかつた。自分は自分の腰を掛けるものがないことに氣が付いた。室内には椅子が一脚しかなかつたのだ。佐治君は一脚の椅子に自分のみ身を寄すやうな人ではない。自分はつと立つて小使と呶鳴つた。小使は慌てゝ驅けて來た。椅子を持つて來い、急ぎだ〳〵と命令した。小使は椅子を持つて廊下を傳つて來る。面倒臭いので自分は驅けて行つてひつたくるやうにして教室へもどつた。佐治君は却て氣の毒相な顏をしてテーブルの前に立つて居たがあたふたとはひつて行く自分を迎へ見て少し體の位置を轉じた。自分はすぐに其椅子を佐治君の傍に据ゑた。佐治君は自分が椅子につくのを待つて漸く腰を卸した。いつもの如く俯向いて居る。

「お忙しい所でしたらうか」

佐治君は重く口を開いた。

「いゝやなに用があるといふ譯ではないです」

自分はかういつた。

「お宅へおもどりのお邪魔をしても相濟みませんが」

其の低い聲が尙沈んで心もとなげである。

「えゝ決して、暢氣なんですからそんなことはないです」

自分は勢かういはなければ成らなくなつた。佐治君は例の如く力の抜けたやうに椅子に倚りながら暫時無言であつたが

「私はもう此の中學を去らなければ成らなくなりましたが、それに就いては此の一年間最も親密な御交際を頂いたあなたへ心殘りのないやうに申上げて置きたいことがあるのです、お聞きくださるでせうか」

「何でもどうぞ」

自分は丸太でも投げ出した樣にかういつた。さうして餘りに曲のないのに氣が付て椅子を少し後へずらしてすつと自分の破れた靴を引いた。

「それは私の過去から現在に接續して居る運命であります。此の學校にもせめて三年も奉職して居ることが出來ましたならば幾らか義務を果すことが出來たでありませう。僅に一年で去るのは私の心に羞ぢない譯には行かないのであります。然し私の境遇は私を鞭つてかういふ方向に赴かしめたのであります。現在に於て私の身を處する最善の方法はこゝを去ることなのですから仕方がありません。此は私のすべてをおはなし申さねばわかりませんけれど……」

兩手を拱いで首を傾けた佐治君は其柔和な小さな目を閉ぢた。

「私は高知の、士族といつても極めて小身な貧しい家に成長しました。私が中學にはひる年頃に成つた頃はもう私の一家は糊口することだけが苦痛でありました。私はそれでもどうかして高等の學術を修めたいといふ希望が絶えず小さな頭を往來して居ました。其頃市中に相應な財産を

所持して居た商人がありました。私は其商人の養子に成りました。そこには娘が一人あつたのです。私の父は昔氣質な義理堅い頑固な人で、其時町人の家へ養子にやることは成らんと拒んだのでしたけれど然し父は私を愛して居ました。さうして私の切なる希望を達せしめる方法、即ち私の長い將來の學資を得せしめるのには其商人に托する外に何も思案はなかつたのです。私は其頃の不完全な小學に於ては成績の佳良な生徒であつたのです。商人――私が今養父と呼ばねばならぬ人は金錢を擁して倨傲でありました。貧乏士族の子ではあるが性質が惡くないやうであるから養子にしてやるのだといふのであります。養父がこれ程のことをいふのを父は有難に知りませんでした。舊藩の時代に於ける士族の壓迫に

對する怨恨が一つは養父の念頭を去らなかつたのでありませう。私の一家は事實の上に町人の家に降服したのであります。自分の財產は一人二人を敎育するために何の增減する處もないから、それだけの金錢は捨てた積でくれてやるのだと養父は酒を飲んではいひました。頑固な私の父が其當時私を養子にやるに就いてどうして自分を抵げましたか、又到底相容れざる私の父から養父はどうして私を貰ひ受けましたらうか。私は性質が全く母に似たのであります。母は女らしい人でした。女らしいだけに遠い將來を慮れと望むのはそれは無理でした。それ故私の希望は直ちに母の希望でありました。母は泣いて私のために父に訴へたのです。又他に人があつて私を頻りに養父に薦めたのでした。私はどうして頑固

な父の反對も顧慮しないで養父の許に走つたのでせう。母の同情が私の心を丈夫にする第一の味方でありました。さうして倨傲な養父の許に甘じて居りましたのも一念學問のみ志したからであります。學問といふことは學校を順序よく經過して行くといふことより外に觀念はなかつたからであります。さうして養家を離れては私の目的を達する方法が絶無であると信じたからであります。母の性質を享けた私は現在は猶更であります、嘗て人と相爭ふことを能くしません。遂に少年の虚榮心が私を盲目にして養家に送つたのであります。養家の娘に對する私の情は遂に深く私を其家に結びつけました。無邪氣に騒ぐべき少年の時代に私は早く婦女子の情味を知つたのです。私はそれに就いて何も意識しては居ませんでした。娘は私の妻として最初から定められたのであります。娘は私に優しくしてくれました。私は小さな心にも糊口の苦しみを刻まねばならぬ家庭を離れて周圍がすべて華やかな家族の間に介在して只愉快でありました。それが私の最も幸福な時代でありました。幸福な時代であつたことを追憶する時幸福は既に去つて畢つて居るのであります。私が異數に婦女子の情味を知つたのも果敢ない少年の一夢に過ぎませんでした。自分は佐治君に引き入れられるやうに感じた。始終俯向いて居る其頰を見つめて居た。」

「養父は投機的の人でした。悲運は養家を襲ひました。投機の失敗は急激の打撃でありました。養父は殆んど狂奔しました。然し及びません。

一家は一人の心から破れました。それでも其時はまだ表面だけはどうにか繕つて行くことが出來たのであります。其中に私は中學の課程を終りました。私の妻は乳兒を抱きました。泣き叫ぶ兒を措いて妻は立ち働かねばならなくなりました。私は父として其泣く兒を嫌しながら机の前に坐することもありました。順序として私は高等學校に進まねばなりません。私は約束が履行さるべきものと思つて居ました。然し養父は酒の勢を藉りて私を突き放しました。今日以後は一錢も學資として支出すると は出來ぬといふのであります。薄弱な私は妻と相抱いて泣きました。父は之を聞いて激怒しました。それ故自分は最初に拒絶したのである。最早一刻もそんな人でなしの家に置く譯には行かぬ。早速離縁させろと敦

圍くのです。尤も父の感情は五年間一度も和らげられなかつたのです。養父は一回も父を訪ねないばかりか父がたま〳〵私に遇ひに來ましても多忙だといつて挨拶もせぬことがありました。みんな金錢から來る倨傲の態度でした。父は齒噛みをして怒りました。さうしてお前が可愛からおれは默つて居る。おれはまだこれ程の侮辱を蒙つたことはない。以前ならば一刀のもとに切り捨てるのだといひました。養父は義理といふものの上には驚くべき放膽な人であります。それでも私は妻を捨てゝ父の命に從ふことは其苦痛が許しませんでした。私は養家に對して五年間の恩義があります。私の妻が私に對して貞淑であることは既往も現在も變りはありません。私は泣いて幾度父の家に往復したでせう。私に於ける子

といふ繫累は父の怒を餘儀なく鎭めました。養家の境遇が私を見棄てゝから私は他に學資を仰ぐべき道を求めねばならなくなりました。私を救ふ人は唯一人あればよいのであります。私は世間が意外に狹いことを知りました。微細な私といふ一人が人の視線に洩れることは當然のことであつたのでせう。然し遂に其人が有りました。私は妻子に別れて岡山へ赴きました。單純な寄宿舍の生活は始まりました。私は此から孤獨の境涯に移つたのです。岡山に居るうち養父は益自暴自棄に陷りました。店は全く人の手に歸して私が最初の歸省した時には小さな假住居に一夏を過しました。飢渴が目前に迫るやうになりました。貧窮は私の幼時から經驗した處でありますが、私の成長した家は私を敎育することさへなければどうにか糊口の道は立つのです。貧窮は家族の者に於て常態であつたのです。然し養家の落魄は痛く私を悲しめました。私は斷然私の學資の一部を割いて妻に送ることに決心しました。一部といつても僅かに三圓に過ぎません。此の三圓が私の他借の學資に於ては非常の減額であります。それと同時に妻の爲めには心强い收入でありました。私の子は此かために成長したといつても過言ではありません。私はまた其頃から飜譯や其他のことで雜誌へ寄稿しはじめました。茶話會一席の會費に過ぎぬ收入が私の一家を潤ほしました。一身は別離して居ても妻と苦痛を分ちたいといふのが私の念慮であつたのです。」

私の恩人は遂に私を捨てませんでした。私は大學へ進みました。其頃

の私の一家はもう形容が出來ません。養父は依然として投機的の成功を夢想して豪語して居ます。家族とは殆んど交渉がなくなりました。私が大學へはひつてから妻は幼い子を抱いて上京しました。落魄の身を故郷に曝すことが堪へなかつたのと、一つは私を見ることの機會があるといふ心の慰籍があつたからであります。東京からは歸省するといふことは私には出來なかつたのです。私の長い暑中休暇は悉く糊口の資を得る爲に費されました。私は遠く離れて居るために妻を忘れようとはしません。だから妻の近く來たことが幾分私の心を丈夫にしました。然し私は憔悴した顏を見ることは却て苦痛の種でありました。妻は裏長屋の一隅に潜んで居ました。僅かばかりの賃仕事をして居たのですけれどもそれで糊口の出來ないのは勿論のことであります。私は止むなく學資の内から其時六圓づゝ割いて與へました。雜誌へ筆を執ることも絶えず止めませんでした。此が私の家族に取つては重大な資本でありました。其時まだ表面の成績といふことを顧に少なからぬ影響を蒙らせました。其時まだ表面の成績といふことを冷視する程に私の修養は積んでありません。私は時々妻に會ふ機會はありました。然し妻の姿は只私を泣かせるだけであります。それよりも私の心を抉ぐつたのは私の幼い子であります。高等學校に在學中私の子は腦膜炎に罹りました。幸に生命は繫ぎましたが、土地に良醫がなかつたのと落魂の境涯とで十分の加療が出來なかつたのです。其爲め病後の私の子は白痴のやうになりました。女の子が六つといへば相應に物心がつ

かなければならぬ年齢であります。然し私の子はまだ言語も不明であります。到底發達の見込はありません。妻が私に一身を捧げ憐みを請ふ有様は私をしていぢらしく思はせます。だが私は私の子に對して衷心からの愛情が薄いのです。多年別離して居たことが愛情を惹き起す動機を與へなかつたのでせう。私が强ひて抱かうとも思つても恐れて近づきません。數次其子の歡念を買ふ方法をとつて見ましてもすべての機能の遲緩した私の子は他の幼い子に見る樣に快く懷くといふことはないのであります。それでも私の子であります、仕方がありません。子に對する妻の苦心を私も身に分たねばなりません。遂に屢父からは離婚を迫まられました。然し私に子のあるといふことが何時でも父の口を閉ませました。かういふ間にも養父の態度は益父の律義な怒に火を點じました。父は我慢し兼ねた時に其離婚のことを私へ劇しく迫つて來ます。私は止むなく本姓に復歸することにだけは成りましたが然し私は落魄の故に貞淑な妻を捨てることは出來ません。私が岡山に往つた頃知名の牧師が來られたことがあります。私は其牧師の演說を聞いて感動しました。さうして牧師の宿所を訪ねました。それから私は深く基督敎を信ずるに至りました。妻を去ることを基督敎は大なる罪惡として戒めて置きます。妻は私が父から受ける壓迫を知つて居ます。時にはあなたの將來のために私を捨てゝくださいと要求することがあります。此が女の口から泣かずにいはれませうか。私が妻を去る時には妻は即時に此の世の人ではありません。妻は死

を決して居ます。白痴の子を抱いて深夜に彷徨つたことが幾度だか知れないといひました。懷にした剃刀をとつて死なうと決心して見ても子を殺すに忍びなかつたといひます。私の妻は意志の鞏固な女でありまして。動機を與ふれば死するにちつとも遲疑しないでありませう。さうすれば私は更に殺人の大罪を犯さなければ成りません。此が私に忍ばれませうか。私のかういふ境遇から私の腦髓は思索に耽る習慣がついて居ました。私にも功名心は沒却することが出來ません。だから勢ひ研究の餘地が多い學科を選ばせました。さうしてまだ發達の途上に在る社會學が私の心を惹いたのです。卒業してからも私は直ちに收入の方法を立てなければならないのでありました。一つは私の虛弱な身體を少しでも改善の途に赴かしめるには田舍が尤もいゝと信じましたから私は此の中學へ赴任することに成りました。赴任と共に妻は高知へ歸らせました。妻子と同棲することには父の頑强な反對があつたからであります。父に對する遠慮から故鄕とはいひながら妻子を遠くへ逐うたのです。それと共に一方には妻を慰めるために俸給から十二圓を割いて送りました。妻は高知へ去る時決して泣きませんでした。妻の鋭くなつた眼光は却て私の心を强く刺戟しました。さうして妻に送るべき十二圓は私の收入から分割し得べき最大限度であります。私はまた恩人へ學資の返濟をしなければならぬ義務を有して居ます。私は更に又父の老後を慰めるために若干を割いて居ます。私の生活が此でどれだけの餘裕がありませう。それで止む

を得ず雜誌の寄稿に勉强しました。私の周圍と私との間を圓滑にして幾らでも幸福に接近せしめるには切實に正當な方法から得る金錢の必要を感せしめます。私の家族に福音を齎ずものは金錢の外に何もありません。私は此の暑中休暇に上京して或る講習會に臨みました。其時知人から此の程設立になつた九州の商業學校に教鞭を執ることを勸誘されました。俸給の增額が心を惹きました。私は講習會の畢ると共に其報酬を旅費にして歸省しました。故鄕に近く關東を去るといふことに依つて父の心を動かしました。哀訴の結果私が妻子を迎へることの承諾を得ることに成功しました。私の收入は一ヶ年に就いて二百四十圓を增すことになりました。私も教育者として金錢を目的とすることの卑劣な行爲であることを知らないものではありません。それで九州に去ることは一たび私の良心を苦めました。然し私の行爲は罪惡ではないと思ひ返しました。それは妻子を復活せしむることが出來るからです。家庭を形ることによつて妻は長い困難から救はれます。唯頑固な私の父は妻子と同棲することを許容する條件として父が養父との交際を絶對に拒絶することに就いて決して容喙してはならぬといふことでありました。私が父に服從してもしませんでも兩方の父は到底交誼を全うすることは出來ないのです。それは私が苦慮しても及びません。私は私の憐むべき妻を救ひ得たことを以て滿足せねばなりません。俸給の增收はまた私の恩人に對する義務を果す時間を短縮することが出來ます。貧窮な父の老後を慰めるに大なる便

宜を有します。かうして私は斷然九州に去ることを決しました。然しながら教育者として僅に一年で辭し去るといふことが私の良心に創痍を蒙らしめねばなりません。私はあなたに羞ぢなければなりません。無言で去るに忍びません。それ故私はこれだけを聞いて頂きたいと思つたのでした……。

佐治君は姿勢を少しも崩さない。其低い聲が自分の教室の内に充滿して強く自分の耳を刺戟するやうに感じた。佐治君に此の如き事實が存在して居やうとは夢想だもしなかつた。自分は佐治君を疑つて居たことの不明を衷心から羞ぢた。佐治君に於てはじめて人格といふものを認め得た如く感じた。自分は此から後の佐治君が漸く幸福の生涯を送りうべきものと想像せられた。さうして其一事を以て佐治君を慰めようかと思つた。然し自分は佐治君のために心から身體から捉へられて自分は竦縮むだやうな狀態に在つた。一語をも發し得なかつた。自分も俯向いて沈默を守つて居た。

「然し私の煩悶はそれでも永久に去りません」

佐治君の聲がひどく自分に響いた。

「私は父の條件に就いては暫く忍びませう。私の家庭は於ける煩悶は永久に去ることはありますまい。私の嗜好は碁を打つ以外には何もないのです。私は睡眠狀態に在る時の外は絶えず私の腦髓を苦めて居ます。私の腦髓を苦しめねば私は淋しさに堪へません。碁は私の腦髓を休ませる

ものではありません。私の一日は責任ある時間を除いてはすべて苦悶であります。私には以前から一種の癖があります。衣類も唯一着でも品質の善良なるものを叮嚀に所持して居ることに満足したいのであります。器物の如きものでも見て快いものでなければ私は日常の使用に堪へません。順境に立つて私が専門の學術を攻究することが出來たとしても到底私は間斷なく腦力を消耗して行かねばなりません。さういふ時にせめて妻の容貌が美しかつたならば私は妻に對することによつて私の疲勞を恢復することが出來るでありませう。他に嗜好のない私には妻の美貌といふことが私を慰むべき唯一の條件であるのです。だが私の妻は見るも厭はしい醜婦であります。逆境に立つて苦鬪した結果内に潜んで居た鞏固な意思が歴々として容貌の上に表現されて來ました。私は妻に逢ふ時最初の一瞬間は必ず嫌惡と恐怖との念を起さないことはありません。家庭を形つたならば生活の安心から幾分女らしい優しさを恢復することが出來ませう。其他に於ては年齢が絶對に許しません。從來私は妻の爲に悲み妻を救ふことにのみ專ら私の心を傾けて居ました。さうして稍恢復した私の運命は私を妻と同棲せしめることになりました。それと同時に私の心には切實に妻を厭ふの念が湧起しました。私は九州に去ることに依つて愁眉を開きうる筈でなければなりません。然しながら妻に對する煩悶は私の心を更に搔き亂しました。私は此の幾年來自分自身のすべてをも公平に判斷しうると思ふ程煩悶に伴ふ思索と考慮とを養つて來ました。

それでも私には私の家庭に光明を發見することは出來ないのであります。妻は商人の家に唯奢侈な少時を送つたゞけであります。俗用の書狀だけでも私の代筆が出來るならばまだしものことであります。私の机の上の整理さへ安心して任せることは出來ません。私の後天性の道義心は頑强な父の反對をも顧みず此の如き絶望に近い妻と共に家庭を形らせるのです。さうして私は白痴に等しい私の子を發達せしめるために父たるものの義務として能ふ限りの力を盡さねばなりまもん。養家に人となつた當時の私は妻の愛情を味ひ得た外どうして私の眼が美醜を分ち得たでありませう。私は後日の悔を貽すことに餘りに無邪氣であつたのであります。私は不滿足な妻を腦裡に浮べては絶えず憂鬱に陷ります。妻と私との間を繫いて放たないものは一片の道義心に過ぎません。私の信ずる程度に於ける基督敎は毫も私の煩悶を解決してはくれません。

涙がぽろ〳〵と憔悴した頰を傳はつて流れた。

「此の數年來私は幾度私の境遇に就て心のうちに解決を求めたか分りません。さうして何時でも無效に畢つて居るのであります。私の理性が築き上げたものを感情は直ちに根抵から破壞し去るのであります。破壞されつゝ私は身を處理し來つたのでありました。私は煩悶して憂鬱に陷る時そこに私の住居を求め得る如く感ぜられます。憂鬱の狀態が私に快感を與ふる樣になりました。私の身體は同時に損はれなければ成りません。悲しい快感を得るために私の細胞は減少します。私は私の肉を殺がねば

なりません。

佐治君は暫く默した。

「私はすぐに福岡へ移ります。私の去つた後聞いてくれる人がありましたらどうか私を語つて下さい。私は從來嘗て人に打明けたことがありませんでしたが、あなたにだけはお話しせねば心が濟みません。」

又暫く間を措いて

「どうも御迷惑なことでしたろう」

佐治君の噺は途切れた。自分はかういふ場合どう挨拶していゝか分らなかつた。實際の處自分の心は弱いのである。自分は唯困つてしまつた。ふと見ると窓の外から沼崎君がホーレーキを擔いた儘微笑しながら覗き込むで居る。放課後にも學校に止つて日を暮すことのあるのは沼崎君と自分ばかりである。

「君はまだかい」

沼崎君がいつた。

「もう歸らう」

自分は答へた。三人は一緒に學校の門を出た。

自分は家に歸つてからもぼつとして同情に堪へぬ佐治君の身の上を思つて居た。自分は座蒲團を枕にしてごろりと横に成つた。妻は私をどうしたのかと疑つた程である。自分は從來なかつたことが頭を往來した。心理狀態の變化を自覺した。自分の少年時代からの友人で文藝といふ方